



Art Writing No.15 / 2021

特集 つくばアートフィールド





ART WRITING

No.15 / 2021

本誌には、筑波大学芸術専門学群芸術支援領域の専門科目「クリエイティブ・アート・ライティング」（授業担当：直江俊雄）の一環として、学生たちが取材した記事を掲載しています。「つくばアートフィールド」をテーマとして、筑波大学で今育ちつつあるアーティストを紹介します。

直江俊雄

学生の学年等表記について

記事中の学生の学年は 2021 年 3 月（令和 2 年度）当時のものです。

筑波大学では、大学院は「芸術専攻」から「芸術学学位プログラム」へ、学群は「4 専攻区分の中に領域・コース」から「専攻区分をなくした 14 領域」へと教育組織の改変が進行中です。そのため、学年によって所属組織の表記が異なります。

本研究は JSPS 科研費 JP 20H01669 の助成を受けたものです。

故勝井三雄先生には、本学芸術系所蔵のポスター作品について、生前より本授業での活用にご理解とご助言をいただき、またご遺族には本誌へのポスター写真掲載（p.5 図 2）についてご了解をいただきました。心より感謝いたします。

1 授業紹介

04 クリエイティブ・アート・ライティング
直江 俊雄 NAOE Toshio

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

07 自分ではない誰かに、“成り代わる”
銅版画とともに生きること

Artist 佐藤 真奈美 SATO Manami



Writer 山根 由咲 YAMANE Yusaki

10 未知への憧憬
実験的手法で描く脳内風景

Artist 太田 琴乃 OTA Kotono



Writer 野村 柚葉 NOMURA Yuzuha

13 “わかる作品”をめざして
「構成」っていったいなんだ？

Artist 中山 佳保子 NAKAYAMA Kahoko



Writer 里村 亜呼 SATOMURA Ako

16

脱兎の居場所

逃げ場所としての油絵

Artist 山下 葵 YAMASHITA Aoi

×

Writer 白土 恵 SHIRATO Megumi

18

「好き」×「好き」から生まれた世界

『リエちゃんはマフィア少女』

Artist 大国 彩乃 OKUNI Ayano**Artist** 比留間 未桜 HIRUMA Miou

×

Writer 小池 真莉 KOIKE Mari

21

わたしのアート、わたしたちのアート**Artist** 中武 明日香 NAKATAKE Asuka

×

Writer 嵯峨 未玲 SAGA Mirei

23

くうきのかたち

「原展」を通して

Artist 高橋 夏実 TAKAHASHI Natsumi

×

Writer 千種 風香 CHIKUSA Fuka

25

感情を使わないと、私、絵が描けない。

絵画すぎない絵を、描かないで描く。

Artist 溝口 笑美 MIZOGUCHI Emi

×

Writer 樫村 宙子 KASHIMURA Sorako

28

自分だけの写真表現を探して**Artist** 石原 歩実 ISHIHARA Ayumi

×

Writer 江本 萌衣 EMOTO Mei

30

風景と存在の距離の中で**Artist** 名倉 歩 Nagura Ayumu

×

Writer 大森 春歌 OHMORI Haruka

33

漆の「鏡面表現」を目指して**Artist** 高橋 呼春 TAKAHASHI Koharu

×

Writer 木下 碧 KINOSHITA Midori

クリエイティブ・アート・ライティング

Writer 直江 俊雄 NAOE Toshio
筑波大学芸術系

Art Writingの起源と現在

このArt Writing 第15号では、全誌面を芸術専門学群の専門科目「クリエイティブ・アート・ライティング」で取り組んだ「つくばアートフィールド」特集に当てている。

Art Writingは、2005年度より学群に設けた「特別カリキュラム芸術支援学」の専門科目「芸術支援学IICークリエイティブ・アート・ライティング」(科目名は当時のもの)の成果を発表する冊子として2006年3月にその創刊号を発刊し(図1)、6名の学生による記事を掲載した。その冒頭ページには、下記のような趣旨を記した。

「筑波大学芸術専門学群周辺は、教員や学生たちが日々アートを生み出している現場であるとともに、本物のアーティストを目指す学生たち自身が育つ場所でもある。この特集では、アートライティングを学ぶ学生たちが、実際にこのフィールドを取材し、そこで生まれつつあるアートと(未来の)アーティストの息吹を、それぞれのライターの見点から、生き生きと伝えることを目指した」

翌年度には、専門科目「芸術支援学ICー芸術学習のサポートとケア」の成果として、学生たちが主として大学外で取材したり自らが参加し

たりした様々な芸術支援の現場について伝える記事を、特集「芸術支援フロンティア」としてArt Writing 第2号に掲載した。その刊行には科学研究費補助金(萌芽研究)「芸術環境形成支援のための創造的アート・ライティングの学習に関する基礎的研究」の助成を受けている。

以来、隔年で開講されるこれらの科目にほぼ対応して、「つくばアートフィールド」と「芸術支援フロンティア」の2つのテーマを主軸としながら、第15号までつながってきた。学生たちが取材した学生アーティストたちもやがて社会で活躍するようになり、また記事で取り上げた芸術支援活動にも時代の移り変わりを見ることができるようになっている。

2020年度、新型コロナウイルス対策による大学授業のオンライン化がキャンパスの風景を大きく変える中で、人に会って直接話す中から学ぶことを基本にしてきたクリエイティブ・アート・ライティングの授業も、その取り組みについて見直すことを余儀なくされた。時を同じくして始まった科学研究費補助金(基盤研究(B))「アートベースドヒューマニティを志向するアートライティング教育のための基盤的研究」では、大学におけるアートライティング実

践を含むアウトリーチ活動を計画しており、今号では「つくばアートフィールド」執筆の裏側である大学授業を紹介することでその最初の歩みの一つとしたい。

美術批評の学習論：

アートゲームから勝井三雄まで

春学期ABモジュール開講の「クリエイティブ・アート・ライティング1」(履修者32名)は、10回の授業をすべてオンデマンド動画の配信と各回の学生からの提出物とのやり取りで構成した。授業の概要(シラバスの抜粋と各回の実施内容)は表1のとおりである。

この授業ではエドモンド・フェルドマンの美術批評に関する学習論をもとに、現代の作品などを例に取りながらその過程を考察した。学生たちは1年次に履修した芸術支援学概論の中で、この学習論を応用したアートゲームの体験を通して、客観と主観、知識と感情を結び、芸術体験を伝え合うための要件について学んでいる。本授業ではそれを出発点として、美術批評の学習論を構成する4つの側面の教育的意義を学ぶとともに、本学芸術系所蔵のグラフィックデザイナー勝井三雄(1931-2019)のポスター作品群を対象としてライティングの演習を行い、その成果を共有して学習した。勝井氏から私が生前に譲り受けた、自身のポスター作品の制作過程を記録した報道番組の映像を見ながら、デザイナーの発想が多くの人々の関わりの中で形になっていく過程を学ぶことも楽しみの一つである。

新型コロナ以前の授業では、フレームに入れたポスター作品を教室で直に見ながら小グループで意見を交わす活動を行っていたが(図2)、今年度はコンピュータのディスプレイを通しての観察となり、また学生たちが作品について書いた記述や解釈については、教員がまとめて授業で紹介したり、学生同士がオンライン上でコメントしたりすることによって、直接対話を代替した。

アートが育つ現場を歩いて

秋学期ABモジュール開講の「クリエイティブ・



図1 Art Writing 創刊号

アート・ライティング2」(履修者19名)では、春学期開講の「1」を履修済みであり、さらにオンライン中心学習を余儀なくされる状況下で取材執筆に取り組む意思のある学生を履修者とした。授業の概要は表2のとおりである。初回の授業ではArt Writingの発刊計画(表3に抜粋)を示し、人との直接接点制限される中でどのように活動を進めるかという問題提起をし、学生からの状況や見通しを聞いた。

芸術専門学群生は同学年の横のつながりはある程度あるものの、自分の領域以外のエリアに足を踏み入れる機会は乏しいようだ。新型コロナ以前の授業では、未知の専門領域の現場やその学生たちとの出会いから学ぶため、授業時間内に集団で、また授業時間外に個人で学内を歩き、できるだけ多くの領域の教室の扉を開けて、出会った人たちに勇気をもって話しかけ、その結果を授業で報告するという活動を行ってきた(図3)。秋学期になって学生が教室で作品制作する様子は徐々に見られるようになってきたが、今年度の本授業では集団での訪問を行わず、感染防止対策を行いながら学生が個人で歩いて探索した状況をオンラインで報告し、画面上で共有することにした(図4)。

取材対象候補の検討、Art Writingバックナンバー記事を読んだの考察、取材経過報告とプロットの作成などについて、オンラインで各学生から提出されたものを一覧にして随時共有し、他学生の様子を相互に確認しながら学習を進め、学期末にはArt Writingの原稿執筆ルールに基づいて「草稿」という形で原稿にまとめ



図2 勝井三雄作品をライティングし議論する(COVID-19以前)

表1 2020年度クリエイティブ・アート・ライティング1の概要

科目名: クリエイティブ・アート・ライティング1
単位数: 1.0、標準履修年次: 2・3年次、開講時期: 春AB
授業概要: 芸術体験を言葉で伝える活動について学び、制作、研究、教育等における芸術支援の基礎となる能力を養う。
授業計画: 講義と参加協同型学習を中心とした授業形式で、芸術について言葉で表現することの可能性を各自が見出すことを目指す。
第1回 美術批評の学習論とは
第2回 記述の過程と教育的意義
第3回 分析の過程と教育的意義
第4回 勝井三雄のポスター制作過程
第5回 ポスター作品による記述・分析演習
第6回 記述・分析演習成果の共有
第7回 解釈の過程と教育的意義
第8回 ポスター作品による解釈演習
第9回 判断の過程と演習
第10回 解釈・判断演習成果の共有、芸術支援研究の拡がり

表2 2020年度クリエイティブ・アート・ライティング2の概要

科目名: クリエイティブ・アート・ライティング2
単位数: 1.0、標準履修年次: 2・3年次、開講時期: 秋AB
授業概要: 芸術体験を言葉で伝える活動について学び、制作、研究、教育等における芸術支援の基礎となる能力を養う。
授業計画: 記事の執筆と編集を実際に進めながら学ぶ。グループでの相互批評を交えながら、対象の特質を見出して伝える文章を構成し、図版の選択、レイアウト検討、校正、公開に向けて協力する。
第1回 オリエンテーション、Art Writing発刊計画について
第2回 学内芸術エリアの探索について
第3回 取材対象候補の検討について
第4回 Art Writing/バックナンバー記事に学ぶ
第5回 芸術エリア探索と取材候補者選定
第6回 取材対象候補の報告と共有
第7回 取材経過報告とプロットの作成について
第8回 プロット執筆
第9回 記事草稿執筆について
第10回以降 プロットの共有、草稿の相互批評・助言、修正版原稿の作成
授業期間終了後、Art Writing第15号掲載に向けて個別指導

表3 Art Writing第15号発刊計画より抜粋

特集テーマ つくばアートフィールド
筑波大学芸術エリア近辺を自分の足で歩き、学生アーティストやデザイナーの卵へ取材して得た材料から、芸術について独自の視点を伝える記事を書く。
1. 未来の芸術が育つ実験と挑戦と教育の場所。
2. 専門家を育てる過程(芸術未熟)というだけでなく、今ここで起きている芸術の活動として。
3. 筑波大学の芸術教育の生きた姿を学生ジャーナリストの立場から発信し、未来の歴史に残す。
主な方法
1. インタビュー、作品分析、制作や活動過程を観察、取材対象の過去の仕事、この時代や社会の特徴や問題、他のアーティストや関連する人々・団体との関連等、多方面からの調査を総合する。
2. 調査をもとに取材対象の特性や可能性を見つけ、それを具体的な事実を示しながら記事で伝える。
3. テーマ設定、背景情報と直接取材情報のバランス、何を訴えるのか、等について熟考し、明確な視点をもった記事を目指す。

1 授業紹介

た。その後、秋ABモジュールの期間を越えた
取り組みであるが、学生が他学生の草稿につ
いて助言し、それを受けて修正した原稿を提出、
さらに Art Writing 第15号掲載に向けた教員か
らの個人指導に応じて最終原稿を提出し（学生
によっては何度か添削・推敲を繰り返す）、取材
対象となった学生からも記事内容の確認と掲載
の承諾を得て完成にたどり着いた11名の記事
を今号に掲載した。

相互啓発と個人添削は機能しているか

この取り組みの中で私が興味をひかれているこ
とは、学生たちが互いの活動について批評・助
言し合うことと、最終的に記事にまとめ上げる
までに私と学生たちとの間で繰り返される添削と
推敲のやり取りである。私自身はその過程を楽
しんでいるが、その効果を定めることはできる
だろうか。さらには理論と実践のより緊密なつ
ながりが提示できればより理想的だと思ってい
る。例えば、つくばアートフィールドについて
伝えようとするなら、その芸術教育機関とし
ての歩みと成り立ちをもっと学ぶべきだと思
うが、実現していない。だが1単位の授業に過大
な内容を詰め込むのも問題だ。実践は常に迷
いと期待の中にある。



図3 筑波大学芸術エリアを歩いて探索する（COVID-19以前、マスクをしている学生がいるのは偶然）

すべてのチーム



YBB0821_クリエイティ...

一般

1 第1回

2 第2回

2 第3回以降の授業

3 芸術エリア実地探索報告

3 芸術エリア実地探索報告

投稿

ファイル

メモ

+

チーム

会議



大森春歌 2020/11/06 18:35 編集済み

11/6 16:47 6A202 3-4年生の構成の方々がいらっした。
プレ卒展や週末のイベントに向けて準備をしていた。



すべて折りたたむ



大森春歌 2020/11/06 18:40

11/6 17:51 6A207-2 構成の3年生が一人でプレ卒展の制作をしていた。
たくさんのポスターやポスターが貼ってあった。



編集済み

※11/6 16:56 6A201 構成の4年生3人がパソコンを開いて作業をしており、その奥で2年生が課題作品を制作していた。課題の内容について聞くと、テーマや制作方法について丁寧に教えてくれた。白い紙を組み合わせ自在に立体を作っていた。

図4 実地探索報告のオンラインによる共有（COVID-19状況下）

06 授業紹介 — 直江 俊雄 NAOE Toshio

自分ではない誰かに、“成り代わる”

銅版画とともに生きること

Artist 佐藤 真奈美 SATO Manami
博士後期課程 芸術専攻
芸術学領域3年



Writer 山根 由咲 YAMANE Yusaki
芸術専門学群2年



佐藤真奈美《Mimicry-III》2018
銅版画、60.3×84.7cm

小学校の「図工」の思い出

「版画」という言葉を、久しぶりに聞いた。私は小学校の図工の時間に、版画を彫るのが好きだった。キラキラのプラスチックケースに入った彫刻刀セットを使って、夢中で木の板を彫っていた。この懐かしい記憶を思い出させてくれたのが、佐藤真奈美さんである。

2か月前、私たちは大学図書館で出会った。「大学院で銅版画制作をしています」こう語ったのが、佐藤さん。銅版画って何だろう、そう思ったのも束の間、彼女の作品を見た瞬間に、心を奪われた。そこには版画とは思えない世界

が広がっていた。繊細で優しく、どこか儂い世界。

このような世界を生み出す佐藤さんが、自身の「銅版画」について語ってくれた。

心機一転、銅版画の道へ

——佐藤さんが「銅版画」を始めたきっかけを教えてください。

佐藤 銅版画は、筑波大学大学院に入ってから始めました。出身の北海道教育大学では、油彩画とペン画を並行して制作を行っていたんです。大学に入って本格的に美術を学んでいく中

で、どの手段を使って表現を行なっていくかを考えました。銅版画も候補の一つに入っていたのだけど、ちょうど研究室に所属するタイミングで版画の先生が不在で断念することになってしまっ。そこで油彩画研究室で制作を行なっていくことに決めました。四年間油彩画を描いていたけれど、なかなか自分の納得できるものができず悩んでいました。一方で、楽しみながら制作することができていたのが、ペン画です。線での表現が自分の気質に合っていたのだと思います。実際、油彩画よりペン画の方が多いの人に評価されていました。

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

大学院に入ってすぐはペン画を中心に制作を行っていました。しかし授業や個展に提出する作品には、ある程度大きさのあるものが求められるんです。ペン画で大きな作品を生み出すのは難しいとすぐに感じました。洋画の油絵具などの物質的な堅牢さにどう勝つか、ペン画特有の「軽さ」をどう扱っていけば作品として質の高いものができるのか、こういった課題も出てきました。

そんな中、筑波大学では学部の頃から気になっていた銅版画を制作できる環境が整っていることを思い出したんです。入学して2か月が経った頃、版画の先生が快く受け入れてくれたのもあり、銅版画を始めることになりました。ペン画をやっていたのもあって、版にニードルで線を引いていく感覚はすんなりつかめました。

誰かの表現に、成り代わるような感覚

——佐藤さんにとって、「銅版画」とは？

佐藤 ペン画に代わる手段として始めた銅版画

だったけれど、どんどん銅版画の特性に作品のコンセプトが寄ってきているように思います。だから、銅版画で作らないと作品が成り立たなくなってしまう。今後も作品を作り続ける限りずっと付き合っていくだろうなという存在です。

ペインティングと版画で大きく異なるのが、自分で引いた筆跡がそのまま絵肌になるか、そうでないかという点。版を介することで自分自身の上手くできないところや格好悪い部分を覆い隠してくれたり、意図せず魅力的に仕上がってくれたりすることがあります。「版に助けられている」という感覚が強くあるんです。

私が行っている銅版画は「腐蝕銅版画」といって、ニードルで描画した銅板を腐蝕液に浸けることで版を刻みます。実際に線を刻むのは腐蝕液に任せていて、直接版を刻んでいるわけではないのです。そのため、出来上がったものは自身の痕跡が薄まり、まるで他人の作品であるかのようにも感じます。この、私自身が引いた線がそっくりそのまま誰かの表現に成り代わ

るような感覚は、私にとってひどく安心し、心地よいものでもあります。

完全なものに、成ろうとする意識

——佐藤さんの多くの作品には、一貫して少女と植物が登場しているように思います。このようなモチーフやテーマの着想は、どこから来ているのでしょうか。

佐藤 油彩画を描いていた頃からモチーフは大きく変わっていません。ですが、銅版画を専攻してからテーマは変わってきています。植物をよく描くのは、故郷の影響が強いように思います。北海道の、別海町というところ。自然があふれた土地で暮らして、人も植物も同じくくりで見えるような視点が無意識にあるのだと思います。

先ほど言ったテーマとしては、不完全で未熟なものが人為的にまたは自分自身の意思によって、完全なものへ向かおうとする働きに着目していて、それによって生まれるほころび、ちぐはぐさ、そして危うさを描こうとしています。



佐藤真奈美 《jellyfish》2019
銅版画、23.7×36.1cm

敵から身を守るための変装、理想の姿を模した仮面。これがなければ生きられない、もしくは生きられないと思込んでいるもの。これらは愚かであると同時に、愛しさを感じさせます。完全なものに成ろうとしている意識は、自分ではない何か、他人に成ろうとする意識と似ているのではないかと思います。

テーマの着想は、先ほどもお話したような、自分自身が銅版画制作を行なって感じた、誰かに成り代わるような感覚からきています。自分自身の筆跡を上書きし、腐蝕液で線を刻む銅版画は、自分自身の痕跡を薄める脅威になり得ます。一方で、上手くできないところや格好悪い部分を覆い隠し、想像もしなかった魅力を生んで、助けてくれることもあるのです。自身がおかされている、という危険をはらんでいながらも、生きる手段となっています。

作者が選ぶ、二作品

——ご自身の作品で、特に思い入れのある作品の紹介、解説をお願いします。

佐藤 一点目は、『Mimicry-Ⅲ』という作品です。Mimicryとは、「擬態」という意味。植物に擬態したり、布に隠れたり、敵に見つからないように立ち回る生き物のイメージです。人物の髪の毛が画面全体をほうような動きをつけることで、植物や別の何かの生物に見えるようにも意識しました。銅版画は硬い印象が付きがちなので、髪の毛の曲線表現でしなやかさを出すようにしています。

二点目は、『jellyfish』という作品です。クラゲの浮遊感を意識しました。描かれているのは二人とも同じ人物で、自分の死を見つめています。海の中だけれど、珊瑚の代わりに植物を描くなど、不思議な空間になるようにモチーフを配置しました。グラデーションの表現など、刷る際の油膜の調子に特にこだわった作品です。

額縁にとらわれない版画で、魅力を伝えたい

——今後の活動予定や目標、夢を教えてください。

佐藤 現在は版画の制作と同時に、博士論文の研究テーマとして版画集の研究を行なっています。研究で得たことを活かして版画集制作を行い、魅力を伝えていけたらと思います。今まで非常にクラシックな発表方法ばかりしてきたので、今後はもっとおおらかな、額縁にとらわれない作品を作っていきたいです。

また、文化に乏しい地方に対してワーク



アトリエ見学

ショップを行ったり、作品発表をしたりなどして、芸術を広める活動をしたいです。発表の方法も、ホワイトキューブのギャラリーや美術館だけでなく、カフェや美容院などで行なってもらいたいです。このような日常で利用する場所で作品展示を行うことで、芸術を身近に感じてもらえたらと思っています。いずれ地元、北海道の地でも展示をしたいです。

彫らない版画が描く世界

今回、佐藤さんとの対談を終えて最も印象的だったのは、「誰かの表現に成り代わるような感覚」という表現である。何度も用いられたこの表現は、彫らない版画、「銅版画」の特性であり、佐藤さんの生み出す世界観の源だ。

冒頭で述べたように、「版画」というと彫刻刀で木を削り、墨をつけて紙上から馬車を擦り付ける、こういったものを思い浮かべる。しかし、銅版画は同じ「版画」でも制作手法は異な

る。これにより、私が当初思い浮かべていた荒く力強い表現の木版画とは異なり、繊細で優しく、どこか儚い世界は生まれるのである。

多くの人に銅版画の描く美しい世界を伝えたい、と述べていた佐藤さん。私もこの「多くの人の」うちの一人となった。

未知への憧憬 実験的手法で描く脳内風景

Artist 太田 琴乃 OTA Kotono
芸術学学位プログラム
(博士前期課程) 洋画領域 1 年

Writer 野村 柚葉 NOMURA Yuzuha
芸術専門学群 2 年



私が紹介するのは大学院で洋画を専攻している太田琴乃さんである。彼女との出会いは、私がこの記事を書くために、いろいろな領域のアトリエを見学していて偶然出会ったのが始まりである。彼女のアトリエで「この作品はもう完成ですか」と私が、青、オレンジ、黄色、赤……様々な色が散りばめられてあった大きなキャンバスを指して尋ねると、「これは土台です。今から始めるんですよ。」と彼女は笑って答えた。完成した作品を見せてもらおうと、言葉では表し尽くせない数の色と重なりから作り出される幻想的な景色に惹きつけられた。私は、複数の作品を見せてもらって、子供や不思議な光がよく描かれていることに気づいた。これは何を表すのか。何を思っているのか。もっと彼女の作品、世界観について知りたい。そう思った私は太田さんが参加されているグループ展「IMAGE&MATERIAL」の開催会場で、作品を共に見ながらお話を伺った。

惹かれ続けるテーマ

——太田さんの作品は共通して不思議な光を帯びた不思議な景色が描かれています。子供や木など、何回も見られるモチーフがあるのですが、何か意図やテーマがあるのですか？

太田 実は、私は以前から脳内のことに興味を持っています。描かれているものは脳内のことに関係していて、「脳内風景」みたいなものを表現したいと思っています。脳内のことでも、特に記憶に関することに興味があって、光は記憶物質であったり、複雑な形の木は脳の神経細胞であるニューロンを表していたりします。子供は記憶を象徴するような存在ですね。

——どうして脳内のことに興味を持ったのですか？

太田 私が大学三年生の終わりの頃、NHKの番組で「人体の神秘」というのがありました。そこで紹介された、脳のまだ解明できていない不思議に強く心惹かれたことを覚えています。

その番組がきっかけで、「脳内風景」を描き始めましたね。

——なるほど。描きたいものを大学三年生の終わり頃に見つけて、それを今も突き詰めているということですね。では、それ以前は何を描いていたのですか？

太田 脳内のことに惹かれる前は風景画を描いていましたね。

太田さんの昔の作品を見させてもらったが、色彩や世界観が今のものと違って、太田さんの今のスタイルが最初からできたものではなく、いろいろな経験から生まれたことが感じられた。私はデザインを学んでいる学生だが、まだ、太田さんのようにもっと突き詰めたいという明確なテーマがない。他のものからきっかけを得るという話を聞いて、これから、もっといろいろなものに目を向けてテーマを考えてみよう、前向きに思わせてくれた。



太田琴乃《エピソード記憶》2020年 アクリル・油彩・布・箔 227.3×363.6cm

偶然性を大切に

人によって絵の描き方は全く違う。では、太田さんはどのように「脳内風景」を描くのか。それを形作る表現方法やプロセスについてお聞きした。

——どのように制作を進めていますか？着想方法や工夫している点などお聞かせください。

太田 私は他のものからインスピレーションをよく受けます。でも、描き始める時に描きたいものが決まっているわけではないですね。先日、アトリエでもお見せしたように、まず、キャンバスにいろいろな色を置いていきます。キャンバス上で色を遊ばせている感覚です。色の重なりを見て、描きたいものを見出してって制作を始めます。そこから絵の具を重ねていくのですが、ただ足していくだけではなくて、のせたものをヤスリで削るマイナスの作業を行ったり、違う物質を組み合わせを試みたりなど、様々なことを試しながら制作しています。あと、筆を使わないで指や布、ナイフで絵の具をのせてみたり、油絵具と水を混ぜて、わざと弾かせて面白いテクスチャーを作ってみたり、本当に方法はたくさんあります。

——実験的ですね！私は計画立てて制作するので全くプロセスが違って面白いです。確かにどうやって作っているのだろと思うってしまうテクスチャーや色がたくさんありますし、部分的に布を素材として絵に取り入れてらっしゃいま

すね。

太田 そうです。まさに実験で、色々自由に試しています。試行錯誤の中、自分でも考えつかなかったテクスチャーや色が生まれることもあります。ヤスリで削る作業があると言いましたが、削っても下に隠れている色の層が出たり出てこなかったりで、私には予想がつかない部分もあります。そういう偶然性を大切にしていますね。

——逆に、しないように気をつけていることはありますか？

太田 具体的に描きすぎないようにしています。描いているものに一応意味はありますが、それにとらわれず、見る人がいろいろな解釈ができるようにしたいと思っているからです。その解釈の幅がまた面白さを生むと考えています。

私は太田さんの作品を見て脳内で起きていることを表しているとは考えていなかった。不思議な光が宇宙空間のように見えていた。そのことを伝えると、「そんな風に見えていたんですね！自分と違う見方が知れて嬉しいです。」と太田さんは喜んだ。油絵の自由性や制作プロセスにおける偶然性、解釈の幅などを好むことから、太田さんの枠にはまらない好奇心旺盛な姿勢を感じ取ることができた。

これからのこと

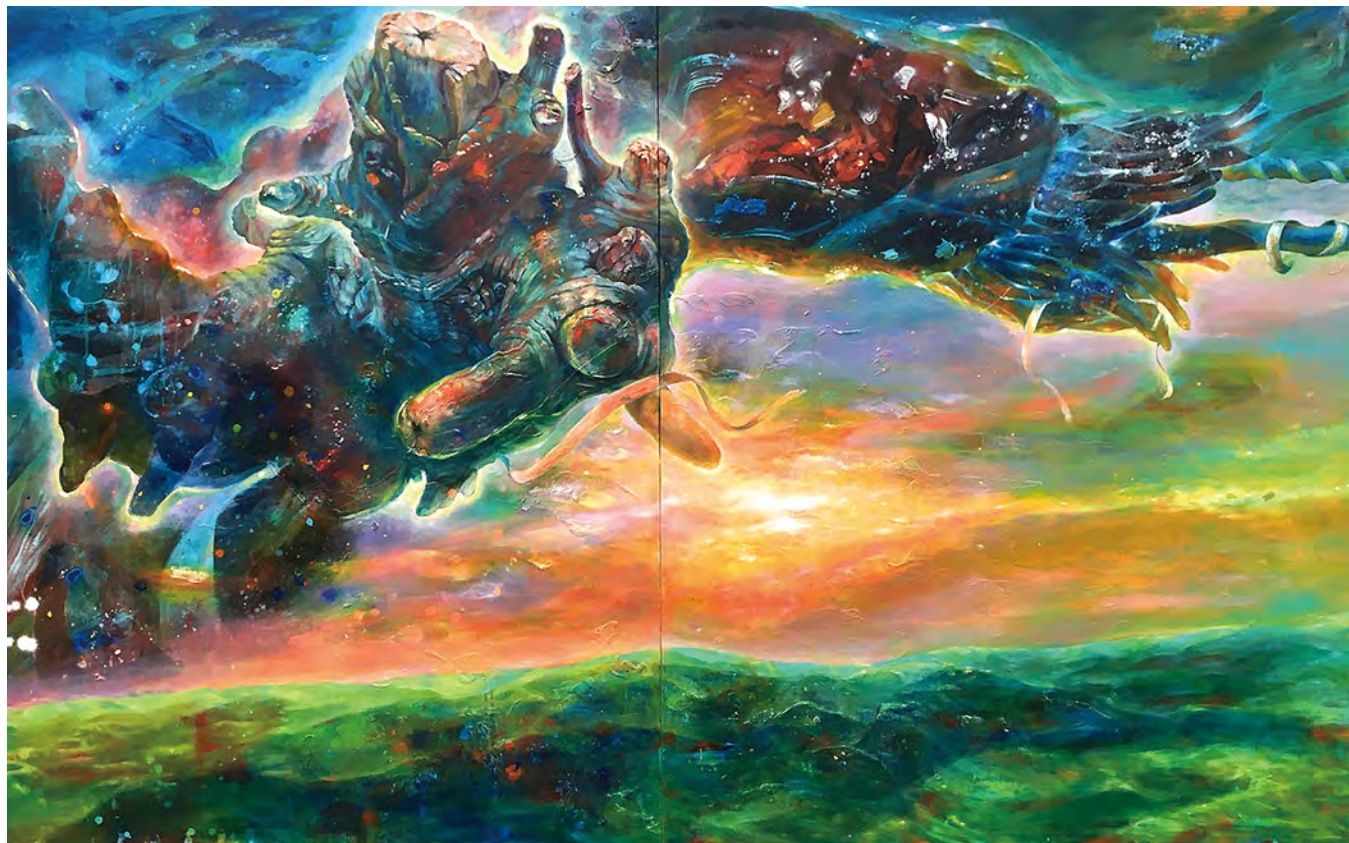
——これからの制作の方針などありますか？何か描きたいもの挑戦してみたいものとか。

太田 まだまだ脳に関する作品を作りたいと考えています。もっと追求していきたいですね。大学院に進むことにしたのも、大学三年の終わりにこのテーマに出会って、大学院でそれを突き詰めたいと思ったからです。挑戦したいことは、もっと外部に発信できるようにすることですね。

——テーマとしては変わらず、脳内風景を表現方法と共にこれからも模索していくということですね。挑戦することとして、外部に発信というのは例えばどういうことですか？

太田 やはりコンクールに参加したり、展示を積極的に行ったりすることですね。実はもうコンクールに「エピソード記憶」を出していて、岡本太郎現代芸術賞に入選させていただきました。これからももっと頑張りたいと思っています。

インタビューをしている間、太田さんは制作以外のことも気さくにお話ししてくださった。私が絵を描くときにインスピレーションを受ける好きな詩や映画について話すと、「私、最近、音に関する研究を紹介してくれる『スクリーンレスメディアラボ』っていうラジオにはまっていて・・・」と彼女は話してくれた。人はいろいろ



太田琴乃《意識の外へ》2020年 油彩・アクリル 162×260cm

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

ろなものからインスピレーションを受けるが、太田さんはNHKテレビ番組「人体の神秘」から脳内のことに惹かれ始めた。音も脳も普段生活していて意識しているものではないが、身近にあって、でも不思議がたくさん詰まっているものだとは感じた。太田さんはそのような未

知の領域に興味に向いているのではないかと感じ、そう伝えると、彼女は少し驚いたような顔をした後、静かにうなずいてくれた。

太田さんは型にとられない自由で挑戦的な姿勢をもって、未知の風景への憧れを持ち続け制作している。自分とは違う領域であり、着想

の仕方やプロセスも違う太田さんだが、一つの好きなことに興味を持ち続け、突き詰めていく力はどの分野でも共通して必要だと感じた。太田さんがその情熱でこれからどのような不思議な景色を、私たちにを見せてくれるのが楽しみである。



太田琴乃《引き寄せる記憶》2020年 油彩・アクリル・布 130×162cm

“わかる作品”をめざして 「構成」っていったいなんだ？

Artist 中山 佳保子 NAKAYAMA Kahoko
芸術学学位プログラム
(博士前期課程) 構成領域1年

Writer 里村 亜呼 SATOMURA Ako
芸術専門学群2年



あなたは「構成領域」という言葉を聞いた時、
いったいどのようなものをイメージするだろう
か。構成は筑波大学芸術専門学群独自の歴史を
もっている学問分野のようで、「作り方や見え
方の原理そのものに着目して表現の開拓を試み
る分野」とのことだ。しかし、入学後にこの領
域の存在について知った私には、どのような表
現を行うところなのか、いまいち理解できずに
いた。そこで、作品制作について知ること
その正体に触れることができるのでは、という考
えから、学内で制作をしていた構成領域の大学
院生、中山佳保子さんにお話を伺ってみるこ
とにした。

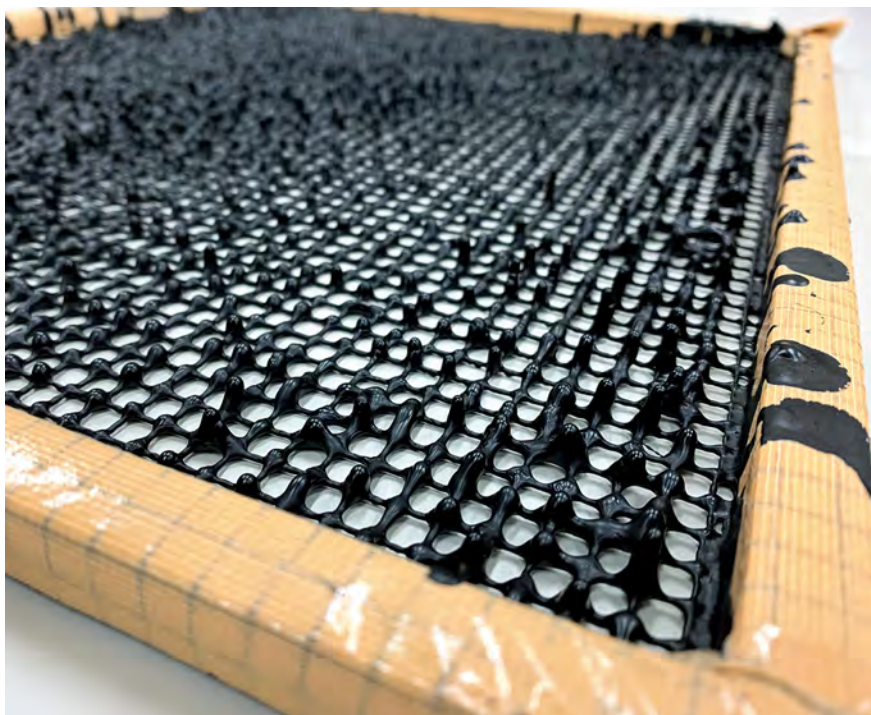
一番のきっかけは「楽しい！」

——はじめに、中山さんが構成領域を選んだ理
由を聞かせてください。

中山 学群2年でこれからどの領域に進むかを
迷ってる時に、構成が形の面白さ自体を追求す
る学問というのを授業で聞いて、そういう分野
があるってことに興味をもちました。あと作業
が性に合っていて、授業で構成の制作課題を
やった時に「すごい楽しいな」って思ったのが
一番大きなきっかけです。入学当初はプロダク
トデザインをやろうと思っていて、デザインを
一緒に学んでいた友達はアイデア出しや問題の
解決策を考えることが楽しいって人が多かった
んです。でも、私は作業で「こう切ったらす
ごく綺麗に切れるな」とかばっかりに興味を持
っちゃって。デザイン分野では作業自体はそん
なに主力じゃないというか、できた方がいいけ
どそこだけにこだわっててもダメっていうのが
あったので、2年生から構成に移りました。

見たことないもの＝普通×普通

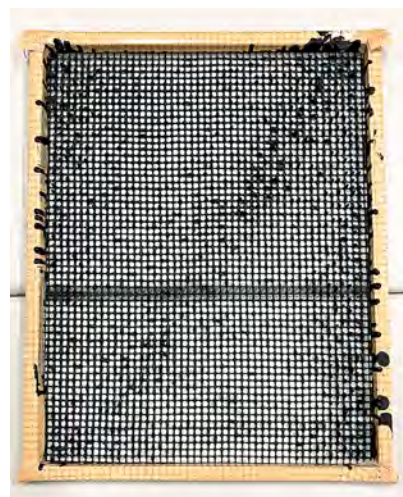
中山さんに会ったとき、彼女は園芸用のネッ
トに刷毛で真っ黒なペンキを塗りつけるという
作品を試作している最中であつた。まず、机か
ら少し浮かせたネットの上にペンキを乗せ、そ
の雫を重力で網の線同士の交点に集め、乾か
す。そして、線の交点から垂れ下がるようにし
て固まった、小さなペンキの山を作り、また何



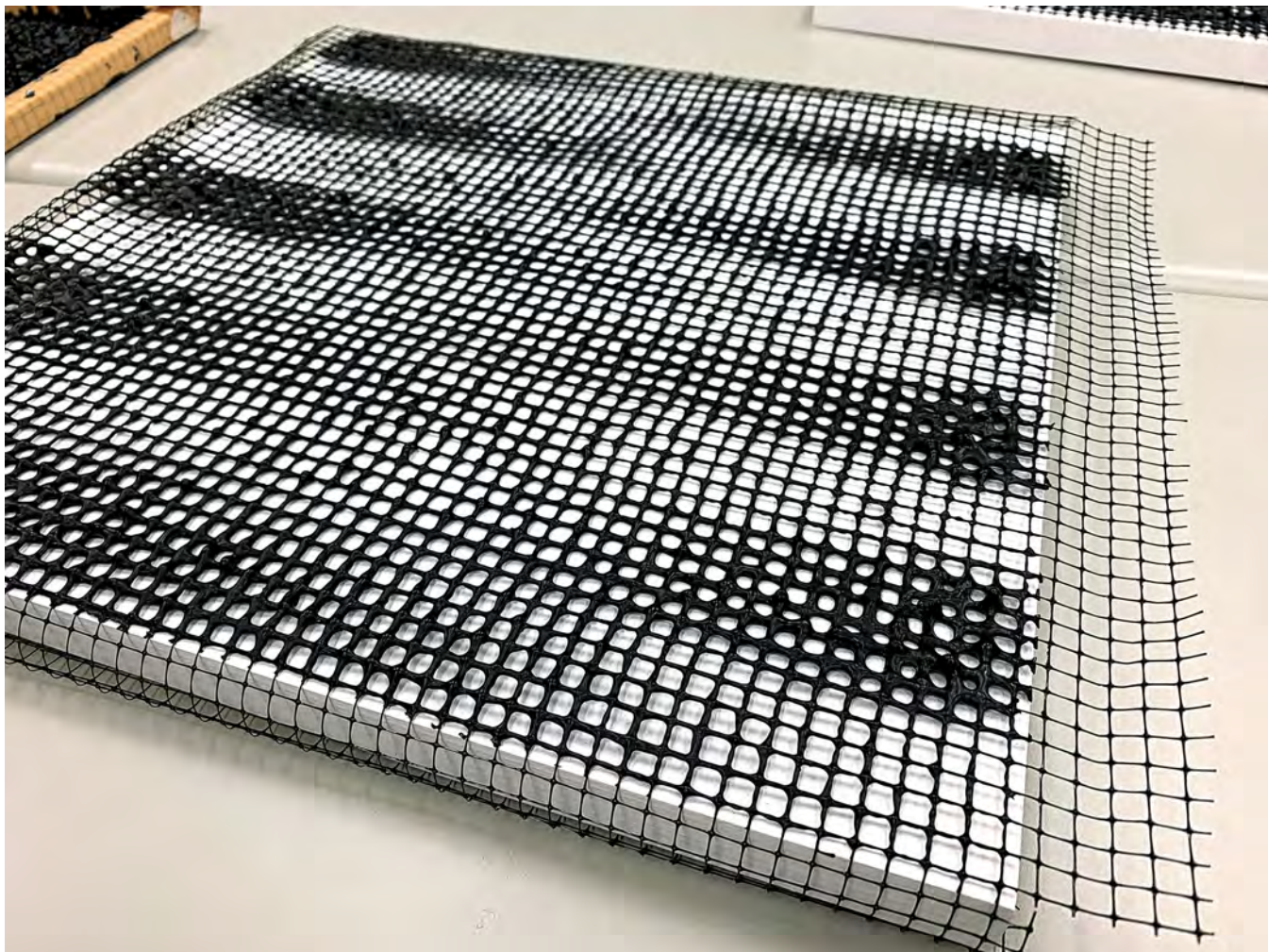
中山佳保子《試作品》2020
園芸ネット、ペンキ、木枠、ガムテープ 35×43cm

度もペンキを塗り重ねて乾かしていく。そうし
てつららのように少しずつ、少しずつ山を高く
していく、という手順で制作をしているとのこ
とだ。今にも網目から離れてしまいそうな危う
さから感じるものなのか、思わずじっと見つめ
たくなってしまう魅力を感じた。この試作品に
惹きつけられ、私はぜひ中山さんにお話を伺
いたいと取材のお願いをしたのだった。試作品は
まだまだ多数あるとのことだったので、取材時
にいくつか持ってきてもらい、お話を伺った。

中山 これは「数理的な構造に偶然性を取り入
れてできる造形」という授業課題で制作したも
のです。網目を数理的な構造に見立て、それに
ペンキを塗って垂らしたらどういう形ができる
かなと思って。刷毛とペンキで色を塗るのって
何の変哲もない描画方法なのですが、塗るのは
通常キャンバスや紙など目が詰まっているもの
に対してなので、それにすき間があつたらどう
なるだろうかと。普通のことを普通じゃないも
のに対してやったらどうなるか、というところ
から始めました。「特殊なこととはしたくない」と



(同上 真上から撮影)
授業課題のための試作品の1つ。右上と左下の角を
繋ぐ対角線を境界として、右側と左側それぞれを対
角線と外枠を行ったり来たりするようにペンキを塗
り制作したもの。刷毛目の起点となる対角線上と周
縁部は高さのある山が見られるが、右側・左側それ
ぞれの中心部に進むにつれ、次第に山が低くなって
いる。



中山佳保子《試作品》2020 園芸ネット、ペンキ、木製パネル
こちらが試作品の中の1つで、点ではなく線の部分にペンキが集中してしまったため失敗とのこと。

というのが自分の中であって、みんなが知っているもので誰も見たことないものができたらすごくかっこいいと感じるので、できるだけ普通に世の中に出回っているもののかけあわせで作品を作りたいと思っています。

——高さが出ている箇所と低い箇所の差がありますが、法則性などはあったのでしょうか？

中山 刷毛目の向きを変えたらその変えただけ効果が出るのかという実験を行っていて、やっぱりはじめはペンキがたくさんついているので高さが出ますが、そのまま刷毛を動かしていくとペンキが残ってないので薄くなっていて…それを何回も繰り返してやってみました。

——白いパネルの試作の方はペンキの量の差がかなり顕著に出ていますね。

中山 これはちょっと失敗で…。ペンキのメーカーを変えたら粘度が違ったようで、網の線にまわりついてしまい、ちゃんと下に落ちてくれなくて。(線を太く強調するペンキの様子は)めっちゃ見えるけど、これは見えてほしい見え方ではないですね。

——確かに高さが出るというよりは、横に広がっていくような感じです。

中山 線の太さで変化が出てしまったみたいなの…。本当は高さだけで表現して、正面からは見た目の変化がなくて、視点を変えると違って見えるようにしたいんですが、どうしてもペンキは下に垂れるだけではなく線の方にもまわりついてしまいます。その辺も見つつ試行錯誤していますね。でも、それこそ「特殊なことをしたくない」っていうので、普通に塗ってダメだったらもういいかなこの発想自体、と思っています。すごくいろんなことをしてというよりは、普通に塗ってできたら面白いなというわけ。いろいろやろうと思えばおそらくやり方はあるんですが、それがあまりにも複雑になってしまうと自分のあまりやりたい感じではなくなるので。

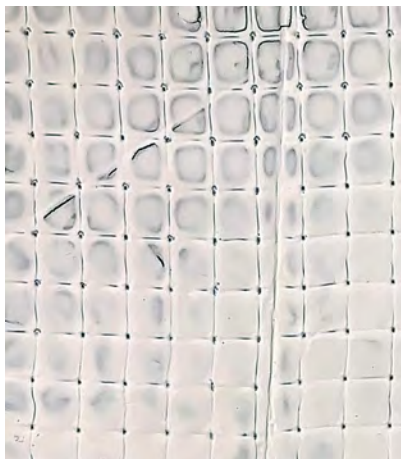
“わかる作品”って何？

——他の人でも実現可能な方法で作りたいというのでしょうか？

中山 その通りです。“わかる作品”を作るというのが自分の中であって、ブラックボックス化せず、作品の種明かしを全部することを意識しています。

——「こういう風に作ったんだろうな」と想像できる作品を作りたい、ということなんですね。そう考えるようになったきっかけが何かあったのでしょうか？

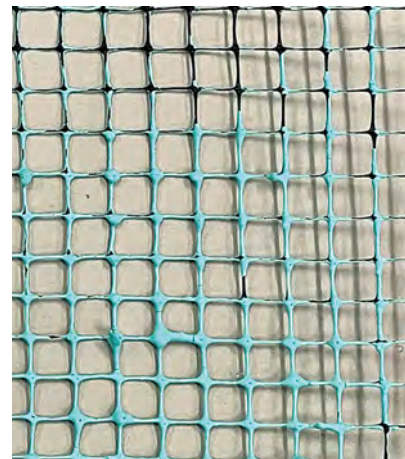
中山 明確にこれっていうのは思い当たらないんですけど、自分が作品を作っていて「楽しい！」と思うところが、制作途中であって。自分がその素材の何に注目したかが伝わるのが大事だと思ってるんですが、私が作ってる作品においては最後の形自体よりも、「ここをこうしたらこういう風に見えた！すげー！」みたいな私の発見を、同じように楽しんでもらいたいと思っています。作品を見ている人にも同じワクワク感を感じてもらえるのが一番いいなと思っていて、「その時こうしたから、これが起こったのが作った人にとって面白かったんだな」というのをわかってもらうには、作ってるところ



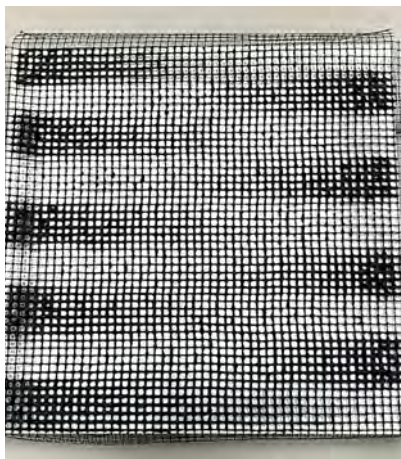
中山佳保子《試作品》



中山佳保子《試作品》



中山佳保子《試作品》（アクリル絵の具）



中山佳保子《試作品》



中山佳保子《試作品》（ドライヤーで乾燥）



中山佳保子《試作品》（網を変更）

が想像できた方がいいと。

——作品を通して、自分の感じたことを見ている人にも共有するというのでしょうか？

中山 鑑賞者と制作者の間に作品があって、作品を通して思いを伝えるというよりは、鑑賞者と制作者が同じ側にいて、制作者が作品に向かって「こういうところがかっこいい」「こうなった、すごい！」ってなってる様子をそのまま鑑賞者にも見てもらう感じで…。

——作っている側も鑑賞者の気持ちみたいな感じですか…！？

中山 作っている側も鑑賞者の気持ち…？鑑賞者も作っている側の気持ち、ですね！そうなるためには、どういう見せ方がいいかなって考えています。

——作った人と見ている人が同じ視点で楽しめるような見せ方をめざして制作しているんですね。

中山 はい。私自身、作り方がわからないものにあまり惹かれなくて、置いてけぼりになっちゃう感じがして。作品を見る時にその感

覚があるので、自分の作品ではそうならないようにしていますね。

「楽しい！」をこれからも

——今後の作品で目指すことや目標などありましたら教えてください。

中山 やはり先ほどの、“わかる作品”というものになりますね。いろんな素材を触っていろいろ試してみて、何かを見つけて、それをどう見せたら自分が楽しんだのと同じように他の人に面白がってもらえるかなっていうのを繰り返すことになると思います。

——これからも自分が楽しいと感じる制作に取り組んで、その楽しさが見ている人にも伝わる作品を目指し続けていく、ということですね。

中山 そうです。それ、だけです（笑）。自分が楽しいって思うことだけ考えていますね。

お話を伺っていく中で、中山さんが「面白い」や「楽しい」という言葉を何度も繰り返し使っていたのがとても印象に残った。プロダクトデ

ザインから構成へと途中で転向したと述べていた彼女だったが、依頼者や使用者などの希望を作品に反映させるデザインと、構成との制作の大きな違いが、自らの発見した「楽しさ」を原動力に制作するという彼女の姿勢によく表れているのではないかと感じた。取材の最後に何かコメントはあるかと尋ねたところ、「構成、面白いよってみんなに知ってほしいです。面白いことを面白いって言うだけでできる、すごい柔軟な、懐の深い領域なのでそれを知ってもらいたいです」と笑顔で話してくれた。自分の感じたかたちや素材の楽しさに対して素直に、真っ直ぐに向き合うという姿勢が、彼女が惹きつけられた構成の魅力の1つなのかもしれない。

脱兎の居場所 逃げ場所としての油絵

Artist 山下 葵 YAMASHITA Aoi
芸術専門学群 美術専攻
洋画コース3年

Writer 白土 恵 SHIRATO Megumi
芸術専門学群2年



少女が涙する訳

雨とも、雪とも言えるような、流れる水玉の奥で、少女が髪をなびかせている。どんより曇った空の下、1人立っている。大きい瞳は、青や水色でテラテラと光を放ち潤んでいる。首元や髪に落ちる影は、少女の顔の輪郭を強調している。左目の下、顎先に溜まる白い粒は、涙であろうか。涙する少女に落ちる青い影は、身体と左に揺れる髪の境目を曖昧にし、まるで少女が水玉の流れに溶けていくようである。彼女には、口も眉もないが、大きく潤んだ瞳だけが、何かを訴えるように私たちを見つめている。

——山下さんは、中央に少女がいる構図や、水玉を繰り返し用いていますが、普遍的なテーマがあるんですか。

山下 一番描きたいのが、泣いている女の子だった。水玉も自分の中でいろんな解釈があるけど、見えない世界の流れみたいなものだね。世界のエネルギーが動く様子が、水玉が流れていくイメージだった。世界の流れの中で、涙を流しているのを、気づかれなく感じる感じで水玉を描いていたな。

——涙を流す理由はあるんですか。

山下 現実世界で、声に出して泣くってあまりできないじゃない？泣きたいほど胸が苦しいのに涙が出ないとき、代わりに作品に泣いてもらった。最初は自分のことを思っていないで、自画像でもなかったけど、感情表現にはなっていたかな。作品に対する私のイメージは、いつも広い枯れ地みたいな草原に、女の子が1人立っているものだった。現実でショックな出来事があったとき、心の中でその場所に行きたいと思った。ショックは人との関わりで起こることが多くて、大人数で喋っている中、自分の感情だけ他のところにあったと気づいたり、みんな同じ気持ちなのに私には分からなかったりして。虚無感や孤独感に襲われたとき、どうしても逃げたくなって、どこへと思ったら、曇り空の下、風が吹いている荒地みたいな草原にぽつんと立っていたんだ。

——作品の中は、山下さんの心象風景なんですね。荒地のような草原のイメージは元々持っていたものですか？

山下 このイメージは、実家の近くの畑から始まったんだ。1、2年の頃スランプで、もやもやしていた時期に、帰省してよく散歩をしていた。歩いていたら、町から外れた場所で畑を見つけた。畑だからとにかくひらけていて、空も広がった。ちょうど曇って雨も降っていたけれど、そこがすごく心地良くて。人もいないし、まるで異世界にきたみたいな気分になった。その体験が印象に残って、つくばでも、似たような場所を求めて散歩するようになった。

2年の風景画実習で行った五色沼も、同じような雰囲気のある場所。みんなが大学で、せわしなく授業受けている中で、のんびり油絵描く時間が良かった。授業終わりにチャイムになって、「早く次に移動しなきゃ」っていつも思うのに、同じ世界でもここでは穏やかな時間が流れているんだって。

喧騒から逃げ出して

山下 あと、大人数でいるところを抜け出すのも好き！脱走癖みたいな。わちゃわちゃしている中から逃げ出して、「ああ、私1人である！」って楽しむのが好きなの。例えば、デッサンの授



《daydream I》2020年、キャンバスに油彩、布、刺繍糸、F3



駅前での展示の様子（「まじろう展」つくばクレオスクエアMOG一階Cosmic art Mira、2020年6月7日～10月10日）

業の最終講評会の前日、1年生の頃は、21時くらいまで石膏室でデッサンしていたんだけど、周りが頑張っているのを見て、「今だ！」って勢いよく抜け出して、近くの公園でブランコ漕ぐの。今みんながデッサンしているのに、私、ブランコ漕いでいるって興奮していたのを覚えているな。そして、何食わぬ顔で戻る。みんな私がブランコしていたこと知らないだろうなって思ってニヤニヤしていた。他にもたくさんエピソードがあるくらい、逃げ出すのが好きなんだよね。

——脱走という言葉はワクワクするものがありますね！その逃げは、作品にも影響しているのでしょうか。

山下 そうだね。でも今の絵は、どちらかといえばネガティブな逃げなんだよね。ある飲み会で、私には受け入れられない内容が平然と話されていて、ショックを受けて、家に帰って放心状態になったことがあって……。ザワザワして仕方なくて、安心した場所に行きたいって気持ちで、逃げ場を求めて絵を描いた。ポジティブな逃げというよりは、耐えられなくなって絵の中に逃げ込んだ方が近いかな。だけど、本当に描きたいのは、つつい訪れちゃうような安心できる逃げ場、ポジティブな逃げなんだよね。結局、それ以上にマイナスな出来事が勝って、この気持ちを描かなきゃって思うから、ネガティブなものが多くなっちゃう。

誰かに寄り添える場所へ

——逆にポジティブな逃げる絵を描けたときは

ありましたか。

山下 駅前で展示した、マフラーの絵はポジティブな感じかな。この子がいる場所は公園なんだけど、私は高校の頃から公園が好きだった。逃げ場でもあり、嫌なことがあっても公園に行けば安心できる、マイナスをプラスに変える場所だと思って描いた。その意味では、ポジティブな絵だったと思う。

——公園がプラスな場所になった訳はありますか。

山下 マイナスに聞こえるかもしれないけど、高校で作品について先生に苦言を呈されたとか、テストの結果が微妙だったとか、いろんなときにわざわざ公園に行ってブランコに乗った。乗っているだけで気分が晴れたし、その時間が好きだった。上がって、下がっての動きが好きすぎて、ずっと乗っていたいなって。そこから公園が、確立した自分の居場所になったんだ。

——逃げ場を描いた作品を、お店という多くの人が見るところで展示したときは、どんな気持ちでしたか。

山下 自分の逃げ場だけど、見た人の誰かの感情にリンクしてほしいと願ったな。同じ虚無感を抱えて苦しむ人へ、私みたいに逃げてもいい、心の拠り所になる場所があるんだと伝えたい。それこそコロナで外出ができないとき、私は好きな作家さんの作品を見て過ごしていた。やましたあつこさんって方で、個展も見に行きたぐらい好き。やましたさんの作品には、2人



左：《Home》2020年、キャンバスに油彩、布、F4
右：《アンダンテ》2020年、キャンバスに油彩、布、SM



まじろうさぎかくれんぼの様子

の少女が愛し合っている幸せな空間があって、自粛期間で沈む気持ちの中、作品の世界ではこんなに穏やかで幸せな時間が流れているんだって思って、自分に寄り添ってもらえた気がした。だから、私も誰かに寄り添えるような作品を作れるようにしたいなって思うんだけど、結局ネガティブな逃げ場になっちゃうんだよね。

話し終えて筆者は、「私みたいに逃げてもいい、心の拠り所になる場所があるんだと伝えたい」という願い自体が、ネガティブな逃げるをポジティブに昇華しているように思えた。山下さんに伝えると「確かに、そうかもしれない」と少し目を丸くして、笑みをこぼした。

脱兎の居場所

山下さんが言う、思わず行きたくなる場所が、みなさんもあるのではないだろうか？揺れるブランコの上、ひっそり建った秘密基地、誰かの隣、ぬくぬくの布団の間……。インタビューを通じて、山下さんの制作に対する姿勢や人柄に触れるとともに、心休まる居場所の尊さや温もりを噛みしめた。山下さんは、今後、筑波大学附属病院で、患者や職員に寄り添えるような展示とワークショップを行う予定だと言う。また山下さんはオリジナルキャラクター「まじろうさぎ」を学内の至るところに隠す活動も行っている。ぜひ「#まじろうさぎかくれんぼ」で検索してみたい。精力的に制作する彼女が、ポジティブな逃げるの作品を完成させる日も近いに違いない。

「好き」×「好き」から生まれた世界

『リエちゃんはマフィア少女』

Artist 大国 彩乃 OKUNI Ayano
筑波大学 芸術専門学群
構成専攻 ビジュアルデザイン領域3年

Writer 小池 真莉 KOIKE Mari
芸術専門学群2年

×

比留間 未桜 HIRUMA Miou
筑波大学 芸術専門学群
構成専攻 総合造形領域3年

「マフィア」×「魔法少女」。相反するイメージを抱く言葉だ。噛み合わないようにも感じられるこのテーマをもとに、2人の学生が一つのプロジェクトを展開している。『リエちゃんはマフィア少女』は、3分のアニメーションから始まった作品群である。「毎週日曜朝9時にやってい

公の少女「リエ」が、スーツに身を包んだ強面の男性の姿をした妖精「ケイ」と契約し、魔法少女となって共に敵に立ち向かう。作品はアニメーションに限らず、コミカライズや学内での展示のほか、Webサイトやファンブックといった実際の商業コンテンツで見られるようなもの

2人でこれだけの活動を行うエネルギーと、独特の世界観が生まれた背景を探っていこうと、『リエちゃんはマフィア少女』(以下、『リエマ』)を制作している芸術専門学群3年生の大国さんと比留間さんにお話を聞いた。

お互いの仕事を「良い」と思える

2人が親しくなったのは1年生の時の免許合宿だという。同じ学年で顔や名前は知っていたものの、実際に話す機会は多くなかった。しかし友人として話しているうちに盛り上がり、比留間さんが元々アニメーションを積極的に作っていたこともあって、ふたりで1本アニメーション作品を作ってみよう、ということになった。

原案やシナリオは2人で考える。コミュニケーションツール「LINE」を使ってラリーのように互いにアイデアを出し合う日々が続き、元日にも絶えずメッセージを送り合っていたほどだった。アニメーションや漫画、ビジュアルといった作画全般は比留間さん、キャラクターデザインやWebサイトのデザインなどは大国さんが担当している。単純な作業量による分担だけではなく、得意分野をそれぞれ担当する。「そうすることでお互いの仕事に対して素直に『良い!』と思えるし、『こんなに良いものを作ってもらったんだから私も頑張らなきゃ』と自分の作業のモチベーションにも繋がっている」と話してくれた。

ただ、仕事量は2人しかないこともあってカツカツだったと笑って話すお二人。授業が少ない期間を活用して学内の図書館で閉館時間まで作業することも多く、ファンブックの制作時期には、「ここにこんな感じのイラストを入れたいな」と思ったらその場で比留間さんが描き下ろすこともあった。

出力方法は違っても根本が同じ

『リエマ』のテーマである「マフィア」×「魔



コミカライズのメインビジュアル

法少女』は、互いに好きなものを掛け合わせた結果、生まれたものだという。比留間さんはマフィア映画、大国さんは女兒アニメといったように、それぞれ正反対の好みをどうやってすり合わせていったのか。大国さんは「出力方法は違うけど根本にあるものが同じなのだと思う」と話す。

2人とも既存の概念を面白がったり皮肉ったりする姿勢が作品作りの根底にあり、それは『リエマ』にも現れている。例えばマフィアの姿をした妖精「ケイ」は、中世の騎士道物語『アーサー王伝説』に登場する人物「ケイ卿」をモデルにしているが、彼は物語の中心人物というよりも主人公を引き立たせるために存在する脇役であり、あえて彼に注目することで作品に深みを持たせている。

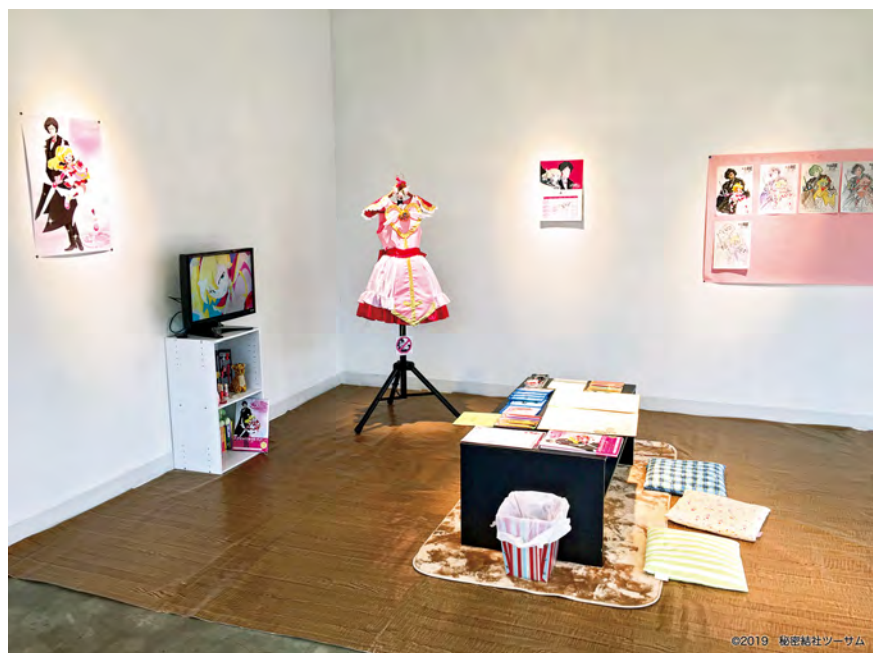
また、実際に互いの好みを共有するために、それぞれ好きな作品を持ち寄って紹介しあった。一緒に鑑賞することも多く、時にはマフィア映画を見た直後に女兒アニメのDVDを見ることもあったと普段のお二人の仲の良さを感じ取れるエピソードも。ただ意見がぶつかる時もあったようで、例えば大国さんがキャラクターの髪色を女兒アニメらしくピンクにしたいと言っても、比留間さんが現実感は失いたくない、と話した結果、金髪など現実でもよく見かける色になった。反対に、比留間さんがダークな表現をし過ぎたときには大国さんがストップをかけることもあった。しかしお二人には「ぶつかった」という印象はなく、「お互いのこだわりや譲れない部分は尊重しつつ、行き過ぎた時にはストッパーになれる」関係性だという。

「K」という一文字から『アーサー王伝説』へ

3分間のアニメーション作品から始まった『リエマ』だが、コミカライズするときにあたって作品の世界観を更に固めることになった。その時、主人公・リエの横にいる男性キャラクターの「K」という当時つけていた仮名を、何気なくインターネット上で検索してみたところ、『アーサー王伝説』に登場する「ケイ卿」という人物がヒットした。騎士というファンタジー要素に加え、アーサー王に仕えた「円卓の騎士」には特有の掟が存在する点に、『リエマ』のテーマである魔法少女やマフィアとの親和性を感じたという。偶然の出会いだが、これが奇跡のように見事にハマった。『アーサー王伝説』は現在でも二次創作がなされたり、ゲームやアニメといったポップカルチャーにも取り入れられていたりするが、『リエマ』では単なる二次創作よりも



初期のキービジュアル



アートギャラリーT+での展示風景（2019）撮影：比留間未桜

2 つくばアートフィールド Artist × Writer



芸術祭での展示風景（2019） 撮影：比留間未桜

更に世界観に合わせた魅力をもつように、デザインやキャラクターの内面が練られている。「ノリで作り始めたものであっても、素地やキャラクターはしっかりしておきたいんです」と、お二人のこだわりを感じた。

複数のメディアを通したリアル感

冒頭にも述べたように、『リエマ』はアニメーションや漫画に限らず、複数のメディアで展開している。学内ギャラリーや学園祭での三次元的な展示も『リエマ』の魅力である。2019年度に行われた学内の「アートギャラリーT+」での展示は、机の上に置かれたお絵かき帳、モニターで流れるアニメーションといったように、アニメ好きな女の子の部屋をコンセプトにしたインスタレーション作品だ。一方で同年秋に行われた芸術祭の教室展示では、「展示会の企業ブース」をコンセプトに、これまでに制作されたイラストや漫画、ファンブックなどがずらりと並べられた。また、ファンブックでは架空のインタビュー記事を掲載し、コミカライズ版のページ数も実際に販売されている商業漫画の一般的なものに揃えたという。二次元と三次元、消費者と制作者といったように複数の視点が絡み合うことで、まるで現実にあるかのようなリアルさを生み出している。

今後の展望

2019年には幅広く活動をしてきた『リエマ』だが、2020年はコロナ禍で会って話す機会が減ったことや、3年生になって個人制作が忙しくなったことからあまり積極的に活動ができていなかった。しかし、芸術祭での展示から一年が過ぎた2020年の11月、Twitterの公式アカウント上で『リエマ』の再始動が告知された。今後



コスチューム

の展望についてお聞きすると、『リエマ』の世界観は引き継いだまま、再始動後に初めて読んだ人も楽しめるようなものにしたい」と話してくれた。比留間さんは「こうして見返すと画力も今と違って、まだやれるって思えることがたくさんある。だからまたやりたいとも思える」と語る。「何より自分たちが『リエマ』のファンなので続きを見たいんです。私たちが作らないと（笑）」と、作品に対する愛着や気持ちの強さも伝わってきた。

取材をしている中で、お互いの好きなものを紹介合ったり、コミュニケーションツールで話しながらアイデアを練ったりなど、普段から友人関係のお二人だからこそ、すごく自然にアイデアや意見のすり合わせができていたのだと感じた。一方で、お互いの仕事を認めて自分のモチベーションに繋げられる、友人関係とはまた違った切磋琢磨し合える関係性も存在してい

る。お二人にとって『リエマ』の立ち位置を聞くと、「個人制作や自主制作とも違う。『共同制作』という言葉が一番しっくり来る」と話す。お互いの「好き」が重なり合い、アイデアを出す中でさらに『アーサー王伝説』のような新しい重なりが生まれていくことで作られている部分に、「共同制作」という言葉の肝があるのだろう。

わたしのアート、わたしたちのアート

Artist 中武 明日香 NAKATAKE Asuka
芸術専門学群2年

Writer 嵯峨 未玲 SAGA Mirei
芸術専門学群2年



生命力に溢れ、画面の中で輝きを放つ人物。色彩が溶け合い、繊細な優美さを内包する植物。あたたかな夢のような色調は、鑑賞者をやさしく包み込むかのようだ。そんな世界を描くのは、筑波大学で洋画を学ぶ中武明日香さんだ。今回は、彼女のスタイルをかたちづくるこれまでの制作と活動についてお話を伺った。

描く原点

——中武さんは普段、油彩画や水彩画の制作をされていますが、自身の創作の原動力となっていることは何かありますか？

中武 小さい子が絵を描く時って、そんなに複雑なことを考えていないと思う。それに近いです。ただただ自分が気に入っているものを描いています。なので、原動力はプラスの方向です。モチーフとしては暗いものを借りることもありますが、描く意識は基本ポジティブです。

——中武さんの中にある美を追求する意識が描きたい気持ちを動かしているのかなと思いました。

中武 そうですね。嫌なことがあった時ではな

く、素晴らしいものに触れた時に心が動かされます。綺麗な世界を作りたい、好きなものを描きたいという意識がいつも根底にあるんです。自分が見てきた素晴らしい色やものが前提であって、それからインスパイアされますね。あとは「色が好き」という理由で作品を集めることもあります。色のボキャブラリーはいつも仕入れているつもりです。

——中武さんの作品は色彩が印象的ですね。作者が誰か見えなくても、色を見て「これは中武さんの絵だ!」とわかることがよくあります。

中武 結構言われます(笑)。きっと癖もありますね。原因は自分でもよくわかっていないんです。それは未熟さゆえかもしれません……。ただ、色づかいは長所かもしれないと思っています。今は、「好き」という気持ちに突き動かされながら、自分の好きなように描いています。私の場合、好きなものを描くこと自体が目的で、自分はそれを追いつける研究者だと思っています。ただ、絵として出力するものの後押しとしては、「好き」以外の別のものがやってくることもあります。それがネガティブなものという

場合もありますね。

——「別のもの」というと、それはどこから生まれるのでしょうか？

中武 海外のミュージックビデオからのインスピレーションを受けることがよくあります。アメリカの、遊び心のあるビデオが多いですね。いろんな人がいることが当たり前の社会で生まれるものだからこそ受けるイメージも様々で、いつも刺激になっています。

大学生活と制作

——大学に入ってから、自身のターニングポイントとなった作品はありますか？

中武 正直、無いです。大きな作品もまだ作れていません。でも、絵を描く意識が変わった瞬間はあります。

——それはいつ頃でしょうか？

中武 大学一年の秋です。それまでは忙さに追われていて、勉強がやるべきことで正直絵を描くことはその次でした。高校の頃からの影響で、何をやるにしても学校のことが第一。そんな意識がずっとありました。言ってしまうと、絵を我慢していたんです。その我慢癖がずっと抜けませんでした。でも、秋のある日に友達と夢についてたくさん語り合ったことで変わりました。話しているうちに、絵が好きという気持ちに蓋をするものに気付けたんです。「大学に来てそれっておかしい?なんのために大学に来たの?」と。

——語り合って言葉にすることが、本当の気持ちを確認したり考え直したりする機会になったのですね。

中武 「私、絵を描くために来たんじゃない!」と思うようになってからは、絵が中心になりました。正直代表作は無いのですが、それがきっかけで思考が変わりました。歩いていても、モチーフ探しをしていても、スマホを見ていると絵探しが中心の生活になりました。今は「描くこと」が第一です。

——現在、描くことに関して何か取り組んでいることはありますか？

中武 コロナの影響で大きい公募展が無くなっ



中武明日香《Imagination》2018年
油彩、F30



中武明日香《とけこむ》2020年
水彩、127mm×178mm



サンドウィッチ店とのコラボ商品企画のアイデアスケッチ

てしまっって描く機会が減ったと感じています。
モチベーションに直結するからこそ、公募展は結構大事だと思ってます。でも、絵を描きたい心はずっと変わっていません。今は、小さい絵を何枚も描いて自信をつけようとしています。ただ、大きい絵に関しては、よい絵が描ける保証が無いことを恐れてなかなか踏み出せないです。でも、コロナで大学にすら入れない時期は終わったし、二十歳になるし、踏み出したいな。今は100号のキャンパスを買おうとしているところです。

——制作においても、コロナの厳しい影響が伺えますね……。

中武 でも、この困難な状況だからこそできた
 こともありました。夏（2020年）に、Twitter上
 の企画に参加したんです。現地では絵を見る機会
 がない、恒例のイベントも中止ということで開
 催されたオンライン展示に作品を出しました。
 「虹色の祝福」というテーマに沿って描いた作品
 を、自分の好きな場所で撮影するという内容で
 した。完成作品を送ったらTwitter上で展示され
 て、いろんな人に見てもらえるのでそれがモチ
 ベーションになりました。

チームワークで生まれるアートとの 出会い

個人での制作だけでなく、アートによる様々な活動やプロジェクトにも積極的に取り組んでいる中武さん。ここでは、チームで何かを作ることに関心し始めるきっかけについてお話を伺った。

中武 中学時代に垂れ幕の共同制作をしたこと

がきっかけで、チームワークで絵を作ったり、活動したりする楽しさを知りました。それまでは絵を一人で描くことが多かったのですが、この経験を通じてみんなで協力して描く楽しさがわかりました。私は構図と色だけ指定したのですが、みんなも言われたものを描くのではなく好きなものを描いていました。人の動かし方がわかった実感を持てましたし、プロジェクトの楽しさを知ることができました。

コラボレーションプロジェクト

—これまでに参加したプロジェクトで、印象に残っている経験はありますか？

中武 高校生の時、「サンドウィッチ屋さんとのコラボに参加してみない？」という先生からの誘いがきっかけで始めたプロジェクトが印象深いです。商店街のお祭りで販売するサンドウィッチを開発するという企画で、デザイン中心の内容でした。お店のことを調べて聞いて、アイデアスケッチを持って現地に行き、お店の人と交流するという楽しさを味わうことができたと思っています。自分の考えたものが現実になったのを目の当たりにした感動も大きかったです。自分でプレゼンをして、現実的な問題をいろんな人と相談することを重ねて……。これは一人の力だとできないので、貴重な経験になったと思います。私自身が人と絡むのが好きなので、楽しんでやれてしまいますね。

——今も、いくつかのチームに参加しているのですよね。

中武 「水戸ワイン」(注1)や「CAIR」(注2)

に参加しています。水戸ワインはやっぱりコロナが落ち着いて動き出したところなので頑張りたいですね。人脈を大事にするという意味でも積極的にやりたいし、絶対に経験値になることだと思っています。どんな活動も、経験がどこかしらで繋がっている気がします。滅多に巡り合えない、そこでしかできない経験を大事にしていきたいですね。

取材を終えて、これから

描くこと、うつくしいと思うものをとことん愛する中武さん。絵の中で生き生きと輝く人物は、エネルギーに溢れ、人との出会いや交流を大事にする彼女のパーソナリティを反映しているように見てとれる。それは、個人での制作とチームによる共同制作を行き来することで培った経験と想いが混じり合うからこそ生まれるのだろう。日々模索しながら一步一步成長し続ける彼女は二十歳を迎え、節目となる作品も制作中だそう(2020年取材時)。「わたしのアート」「わたしたちのアート」が互いに育まれ重なり合う時、どのような世界が生み出されるのだろうか。

(注1) 筑波大学の学生による、水戸のワインとアートのコラボレーションを企画・実行するプロジェクト

(注2) 2019年に開始された、海外の美術系大学の学生と筑波大学で芸術を学ぶ学生とが、共に滞在制作と展示を行うプログラム

くうきのかたち

「原展」を通して

Artist 高橋 夏実 TAKAHASHI Natsumi
芸術専門学群2年

Writer 千種 風香 CHIKUSA Fuka
芸術専門学群2年



どつどつ、ざらざら、まるで惑星みたいだ。そのどつどつざらざらの間をみどり、だいたいが流れて落ちる。こっちはあか、ピンク、しろがくるくると混ざっている。ケーキみたいでおいしそうだ……秋の深まる11月初旬、おなじみのT+ギャラリーに小さな抽象画が並ぶ。高橋さんの個展「原展」だ。高橋さんは、大学で写生を基礎とする日本画を学びながら、抽象画を制作している。不思議な質感をまとう高橋さんの作品について、彼女が開いたこの展覧会に焦点を当てて見ていきたい。



「原展」展示風景

「原展」という原点

高橋さんいわく「今後の制作の“もとづくところ”になる作品を集め」たこの展覧会は、彼女にとって初めての個展である。高橋さんは展覧会のコンセプトでもある、この“もとづくところ”について、「今回展示した小作品はすべて制作の下地になる部分なんです。作品にしたいアイデアが浮かんだら、メモ書きみたいにすぐに形にする。そういう作品なんです」「これから、この作品たちをベースにしてより大きな作品を作りたいと思っています」と語る。高橋さんにとって今回の展覧会は、今後の作品制作のまさに原点であり、それらを方向付ける舵のようなもののだろう。

三歩進んで二歩下がる

高橋さんの抽象画作品には、まるで作品の中にどこまでも世界が続いていきそうな奥行きが存在する。その制作過程は、あくまで作品との対話だ。高橋さんは「必ず引き算の作業がないと作品が完成しないんです。足し引きを繰り返して、この作品には何が必要か、と考えながら制

作しています。」と語る。「原展」に展示された連作《真夜中の訪問者》は、絵の具をのせた後、のせた絵の具をスポンジなどで削ぎ落とす、また絵の具をのせる……といった足し引きの作業の繰り返しで制作されている。これらの作品群には題名の通り、真夜中におぼろげに浮かび上がる訪問者の存在を思わせる、そんな雰囲気がある。この一進一退の制作過程が、抽象画であるにもかかわらず感じられる独特の作品空間につながるのだろう。

すべてはこの手から

「私が絵を描くとき、ドリッピング、にじみなどのモダンテクニックを使用することが多いのですが、そのような偶発的な表現でも、繰り返すと人為的にコントロールできるようになります」と高橋さんは語る。絵の具は難しい。顔料と水といろいろが混ざったこの描画材は、濃度や置き方次第で様々な表情をみせる。高橋さんの作品《corruption》には、素材として、砕いた木炭が使用されている。木炭という異素材と組み合わせることで、当然見慣れた絵の具の表



高橋夏実《真夜中の訪問者》2020年
アクリルガッシュ、モデリングペースト、ニス 50号 (18×18cm)



高橋夏実《真夜中の訪問者》2020年
アクリルガッシュ、モデリングペースト、ニス 50号 (18×18cm)



高橋夏実《corruption》2020年
アクリルガッシュ、木炭、ニス S0号（18×18cm）



高橋夏実《Vinyl》2020年
アクリルガッシュ、ビニール S0号（18×18cm）



高橋夏実《ZERA》2020年
アクリル絵具、アクリルガッシュ（10×7cm）

情も変化する。岩石のように鋭い、砕かれた木炭の間を、絵の具はマグマのようにゆっくり落ちるように流れていく。二つが溶け合って調和している様は、まるで計算されつくしたかのような心地よさがある。作品が素材そのものではなく一つの物質としての存在感を持つのは、ひとえに高橋さんの一進一退の制作過程、作品との対話がなせるものであろう。

絵画って、面白い

『「原展」で展示した作品は、これをやってみたら面白そう！』というような純粋な興味から制作したものが多いです」と高橋さん。身近な素材からヒントを得て、抽象画を制作することが多いという。展示作品の一つ《Vinyl》は、一見してビニールを素材に作られているとは気づかない。花卉のように柔らかで淡い作品に魅了された鑑賞者は、題名をみて初めてそれが身近な素材で作られていることに気が付くのだ……。そ

んな面白い発見がこの作品にはある。高橋さんは自身の作品について「やっぱり作品を実際に見てほしい。足を運んで、実物を目にしなければ分からないような魅力が、絵画にはたくさんあると思います」と話す。高橋さんの作品が持つ不思議な世界に、ぜひ触れてみてほしい。彼女の興味や発見の詰まった豊かな作品は、きっとあなたにも新鮮な驚きを与えるだろう。

原展を終えて、これから

「原展」の中で様々な出会いがあったという高橋さん。「展示に来てくださった方の中で『にじみなどの日本画的な渋い表現に例えばラメを入れるなど、若い人らしい表現を入れているのが新鮮だ』と言ってくださる方がいて。そういった言葉から『私らしさ』を発見する機会がいくつかありました」と話す。作品《ZERA》では、ナイフで盛り上げられたピンク、水色の上にうっすらと黒色が透けて見える。そのまた上にキラ

キラとラメが光り、可愛らしくも重層的な表現になっている。「昔からミニチュアのおもちゃやフリフリのお洋服、キラキラ光るのが好きでした」重層的な画面の中に込められた高橋さんらしい表現が、作品のスパイスになっている。

展示を終えた高橋さんに、今後の作品制作について聞くと、「自分の思い出や経験、それに対しての主観的な気持ちを作品にしたいと考えています。その場の“くうき”を作品で再現したい」と語る。今まで素材や絵の具との対話から、作品を作り上げてきた高橋さん。今後はさらに時間や場所、そのときの心情を想起させるような作品を作りたいという。まさに、くうきのかたちを表そうとしたかのような「原展」の作品群は、これからどのように進化していくのだろうか。

感情を使わないと、私、絵が描けない。 絵画すぎない絵を、描かないで描く。

Artist 溝口 笑美 MIZOGUCHI Emi
芸術学学位プログラム
(博士前期課程) 洋画領域1年

Writer 樫村 宙子 KASHIMURA Sorako
芸術専門学群 芸術学専攻
芸術支援コース3年



溝口笑美さんは、昨年学群の美術専攻（洋画）を卒業し、現在大学院で引き続き洋画を学んでいる。自身の体験や心情をもとにした油彩画作品を制作し、地元や学内ギャラリーでのグループ展を中心に活動している。筆者は、昨年あった学内プログラムで彼女の担当キュレーターとして活動してから、彼女のインスタグラムアカウントに投稿される作品や展示の様子を見てきた。一つのプロフィール画面でこれまでの作品を一気に目にできるというのは、限定された時期と場所で見える展覧会とはやはり印象が全く異なる。作品の一つ一つよりも、その変遷全体が

塊となって、その中に流れるモチーフや描法、雰囲気の変化を面白く伝えてくるように感じられるのである。彼女の学内アトリエにて、彼女のインスタグラムアカウントを眺めながら行ったこのインタビューでは、その面白さを一つ一つの作品から紐解いていく。

——学群時代、特に印象に残っている制作などはありますか。

溝口 学群の頃だと、顔が真っ白のやつ……（インスタグラムアカウントから作品を探す。）

——《また、憂暮れ》、詳細に描き込んでいま

すよね。印象に残る理由などは。

溝口 悩みながら描いたんですよね。私、絵の中にこういう四角とか三角を描きがちなんですけど、それを描き始めたのがこの作品で。——それを描くことに何か意図や狙いはあるのですか。

溝口 この頃は特に何も考えていなくて、こういうのがあったら面白いと思って。形の感覚で描いただけだったのが、だんだん、描き入ると落ち着くような感覚になったかな。

——自身の体験からモチーフや題材を選ぶ時、



溝口笑美《また、憂暮れ》2019年9月
油彩・コラージュ、F100（1620×1303mm）

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

どのような基準をもって日常から取りあげているのでしょうか。印象に残っている投稿で、作品と共に「もっと自由に描きたいな」という呟きもあったと思うのですが。

溝口 描くときのきっかけみたいなものは、自分がそのとき一番に強くある感情。それがマイナスかプラスかでも絵の印象が変わるのかもしれない。……逆にそういう強い感情が起きなかった時、一番絵が描けない。それが新型コロナによる自粛の頃で、何もなくて本当に描けなかった。でも授業で（作品制作の）課題は出されるから、それをやらなきゃいけないけど、描きたいと思えるものもない……みたいな。

——その頃の作品は、今見ても納得いかないと思ったりしますか。

溝口 今思えば、それなりによくやったと思うけど、描くまでが辛かった。「本当にこれでいいのか」って気持ちがありがたながら何とか形にしたという感じで、当時は嫌で嫌でしょうがなかった。その辺で、身近なものから何かを得ようと、描くものを探すことを心がけるようになった。ちょっとしたことにアンテナを張って……

——特別大きな出来事や強い感情が起きなくてをもってことですね。

溝口 起きないから、逆に……それで描いたのが《a woman》。ちょうど梅雨時で、本当に描くものが思いつかなくて、ずっとうろうろしている中で、じゃあもう紫陽花描くか！というのと、ちょうどその時「千と千尋の神隠し」を観たので、こんな感じに。

——見た時もそれまでと雰囲気が違うなと気になった作品でした。まさに自分が見たものからインスピレーションを得て、組み合わせて描いているんですね。

溝口 あとはこれが一番コロナの様子が出ている作品かもしれないです。《自由な囚人》。これは自分の部屋、これがベッドで、絵の具もあって、このカカシは自分。カカシになってずっと動けない。……これにも四角とか描いているな。モチーフで面白いものが出てこなかったから、描き方や描く材料とかで面白くしようとしていましたね。

——非日常の幻想的な雰囲気が出ていますね、目には見えない心象を描いている様子が伝わります。

——アカウントに投稿された展示や作品などを見ると、題材が自分の体験や感情をもとにされているからか、作品によってかなり雰囲気がガラッと変わっている印象があります。描き

方も幻想的なデフォルメしたものがあれば写実的でリアルなものまで。制作ごとに変化を意図しているところはありますか。

溝口 写実的なものはスケッチですね。風景画のように「これを見て描く」となると、そのものの通りに描こうとする。だから最近はあまり資料を使わないようにしています。見ないわけではないけど、見すぎるとリアルな方になっていくので。大学院に進学してから、できるだけ平面っぽく描こうとする意識が出ました。

——「平面っぽく」というのは、リアルに寄ってしまうから違う表現も、ということなのか、そういう表現が好きで目指しているからなのか、どちらですか。

溝口 もともと平面っぽく描きたいと思ってはいたんですけど、ずっとできなくて。

——そう思うようになったきっかけなどはあるのですか。

溝口 たぶん…デザインとか平面構成が好きで、その辺の中間を狙って描きたいと思ってい

るんですね。「絵画すぎない」表現、どこか平面的な要素がある作品が好きです。

——面白いですね。聞いていると、頻繁に描く四角とか三角の形や平面的な構成など、描く形態にはかなりこだわっているのですかね。

溝口 どうなんだろう、確かに画面の構成にはこだわるかもしれない。どこに何を置くか。最初そこだけ決めて、あとの何色を置くのかとかは描きながら考えているかもしれない。

——題材だけではなく、制作中もその時の心情の移り変わりに正直に描いていっているのですね。

——学群を卒業されて大学院に来られて、変えようとしたこと、逆にここは大事にしようと続けているところなどはありますか。

溝口 変わったことは、さっきも言ったように写実から遠ざかろうとしていること。大事にしているのは、絵（を描くこと）ではないところを充実させること。自分が純粋に楽しい、面白



溝口笑美《a woman》2020年5月
油彩・コラージュ、F30（910×727mm）

いと思える経験をしないと、絵に描けないことに気づいた。結局全部絵に繋がっていく。逆に言えば、こういうのが描きたいなって思うために、色々なことをしなくちゃならない。経験に感情も伴ってくるから。何もアイデアが出ない時はアトリエから出ていろんなところに行くとか、楽しい（ことをする）とか。たぶん感情を使わないと、私、絵が描けない。

溝口 これ（アトリエにある、今描いている途中の作品）は、就活しながら思ったことを描いたんですよ。

——なるほど、もっと聞かせてもらってもいいですか。

溝口 例えば……適性検査みたいな機会で、「自分の意見を言う方か」という質問項目があって。自分としては言う方だと思うので、「もっともそう思う」で答えようとした。そしたら、友達から「そこはマックスにしないほうがいいでしょ。自己主張の強い頑固なやつだと思

われる」ということを言われて、え？何が悪いの？クソだなあ……社会ってそんなもんか！ってというのが（笑）

——表れていると（笑）結構、今の聞いているとまさに「自分の意見を言う方」なのが伝わります。ちゃんと反発しているというか。

溝口 私自身、反骨心強めなんですよね。「長い物には巻かれる」みたいなやつもダメで。「なんで？」ってずっと思っている。

——中央の人は自分ですか。よく自画像というか作品のモチーフに自分を描かれていますよね。

溝口 自分が一番手頃なモチーフ。人に頼むよりかは……というか、そもそも自分のこと（体験や心情）を描いているので。だからもっと描き方が変われば、描くモチーフも変わるのかな。——描き方とは…具体的に？

溝口 描きたいこと？みたいな。そう言われるとそうだ、紫陽花のやつ（《a woman》）とかは自分じゃない。久々に自分じゃない人を描いて

いる。

——だいたい自分を描かれる時はわかりやすい特徴がありますね。外ハネの髪や目の形など。

溝口 （今までの作品を振り返って）だんだん顔が出てきているのが面白いです。先ほどの《また、憂暮れ》は真っ白で顔無くて、その次くらいになると顔を隠して、他の人も見えていないし、次はシルエットで、ってなってからやっと出た（笑）あとは普通に顔を描いている。迷っていたんだらうなって思います。この表現でいいのか、自分に自信がなかった。3年生くらいの頃…それが強く出ているんだなあ。

——こう見ると作品が並んですぐ見られるようになっているのって結構大事ですね。先ほども出た《また、憂暮れ》はその中でも特に色々なモチーフを配置していますね。逆にすっきりとした絵は、割と爽やかな気持ちで？

溝口 たぶんそうです。それで、どんどん余計なものを取っ払って行きたくなったんでしょね。

——なるほど、それが平面化や抽象化に……

溝口 確かに！それだ！！そういうことだったんだなあ、今自分で気付きました。なるべくスッキリさせたいというか、シンプルイズベストというか。描かないで描きたい。ごちゃごちゃさせると言いたいことがわからなくなってくる。先生に「絵画はこういう風に伝えるものじゃない」と言われたことがあって。伝えたいことがあって描くのは広告とかデザインになるから、絵画は見る人が自由に受け取るものだ。確かにそこでどう思われようがいいけど、自分としてはこういうことが言いたかったというのは持って描きたい。

——自分のスタンスは持って、「自分の意見は言う」と（笑）こうしてみると溝口さんの性格と描きたいものや目指したいスタイルが一貫しているように感じました。

溝口 そうですね（笑）ありがとうございます。



溝口笑美《自由な囚人》2020年6月
キャンバス・油彩、F30（910×727mm）

自分だけの写真表現を探して

Artist 石原 歩実 ISHIHARA Ayumi
芸術専門学群 構成専攻
ビジュアルデザイン領域3年

Writer 江本 萌衣 EMOTO Mei
芸術専門学群2年



誰もが気軽に写真を撮影する。食べたご飯や買ったもの、美しい風景など、あらゆるものをデータとして残すことのできる現代。写真はなにより身近な表現手法だといえるだろう。そんな今、ビジュアルデザイン領域で写真を学ぶ石原さんは、自分らしい表現を追い求めてシャッターをきっていた。彼女はそのレンズに、どんな世界を写すのか。本インタビューでは、彼女の制作への思い、写真という表現の魅力を伺った。

理由をもって作品を作れるように

—— 石原さんはどうしてビジュアルデザイン領域で写真を学ぼうと決めたのですか？

石原 構成専攻には構成領域とクラフト領域、ビジュアルデザイン領域、総合造形領域があって（注1）。三年生になる時どこに進むかを決めるんだけど、写真をやるなら構成やクラフトは方向性が違うから、進むならビジュアルデザインか総合造形かなあって考えてました。

二年生の夏頃に、ビジュアルデザインに写真専門の先生が来たよって聞いて。せっかく学べるならその先生のもとがいいなと思ったので、今の領域に進みましたね。

—— なぜ筑波大学に進学しようと考えましたか？

石原 筑波大学は総合大学の中に美術の学群がある構造だから、学んでいる分野の違う人とも関われるし、自分の興味に応じた授業を受講できる。その自由度の高さは筑波を選んだ理由の一つとして、大きいかなと思いますね。あとは、高校生の頃に参加した進路説明会での、筑波大学関係者の方の話ですね。芸専（注2）の紹介のとき、「作品をただ作るだけじゃなくて、作品を作る前の段階で自分の思考を深めてから制作できるように」という話をされていて。きちんとした理由をもって作品を作るっていう力が付けられることも、筑波のいいところだと思います。それが結構難しくて苦しんでるんですけど。大切なことなので。



図1 石原歩実《Focus You》2020年

感覚、思考、模索

—— 石原さんが写真に興味を持ち始めたのは何がきっかけでしたか？

石原 一眼レフみたいに本格的な道具を使って写真を撮り始めたのは高校生の頃からかな。写真部に入部したのがきっかけで。でもそれもあり合いがいたから入っただけで、当時は特に写真が撮りたかったわけじゃないんだよね。だけど三年間活動してるうちに写真が楽しくなって、そのまま大学に来て続けているという感じです。

—— 最近はどんな活動をされていますか？

石原 今はもっぱらプレ卒（注3）にむけての制作ですね。大学のスタジオを使って、同級生とか後輩にモデルをお願いして……ポートレートの撮影をここ半年くらいずっとしてました。コロナの影響で春に大学の施設が全然使えなかったの、秋に利用できるようになるまで、構想を練ってる時間が長かったですね。撮影したくても家じゃ限界あるしなあ……と（笑）。

—— 石原さんのお気に入りの作品を見せてもらってもいいですか？

石原 それこそ、プレ卒で使おうと思っていた写真が……これですね（図1）。



図2 石原歩実《Focus You》2020年



図3 石原歩実《self portrait》2020年
コロナウィルスの流行により思うように撮影ができない中、行き着いたのが自身を被写体にするという発想だったとのこと。



図4
石原歩実《daydream01》2019年
2019年に筑波大学内で催された構成専攻有志展にて展示された作品。衣装の制作や装飾品の取り合わせなど、画面を構成する要素の一つ一つを作り込んだ撮影はこれが初めてだったそう。

—— ありがとうございます！光の色合いが目
を惹く作品ですね。

石原 先生に講評してもらった時も、照明の色
が独特だねって結構言われたんだよね。この作
品は、定常光っていう常に光り続けるタイプ
の照明をモデルさんの左右に置いて、それに
カラーフィルターを重ねることで光の色を変え
て撮影したやつなんだよね。色選びは完全に私
の感覚というか……この子に合うのはこの色だ
なって思ったものを選んでる感じ。

—— そうだったんですね。じゃあこだわって
いる部分と言うと、やっぱり照明ってことにな
るんでしょうか。

石原 そうだね。あとは光が被写体に馴染むよ
う意識してますね。光に色を乗せるんだけど、
被写体の真横に照明を置いた状態で真正面から
撮ったら、顔のちょうど真ん中で色が変わって
る……みたいな、違和感のある画面になっちゃう
から。適度に照明に角度をつけたり私自身が
動いて撮る場所を変えたりして、光が馴染むよ
うにしている。

—— ポーズの指定はどうしていますか？

石原 私の意見と被写体の意見・動きとをすり
合わせて、ポーズを決定していく感じですね。
例えばこの子（図2）はダンスを趣味でやって
るので、漠然とした指示を出すだけでおまかせ
できたんだけど。撮られ慣れてない相手だと、
ポーズをイメージできるような細かい指示を出
してあげて、それを見ながら調節するようにし
ています。でも被写体へのくらい指示を出す

かの判断ってかなり難しくて。結構今の悩みど
ころです。

—— プレ卒の作品はスタジオでの撮影とのこ
とですが、屋外での撮影よりも屋内の方が好み
だったりしますか？

石原 プレ卒の制作が、「被写体の魅力を写真
で表現する」っていうところからスタートして
いて、InstagramやTwitterでよく見るような、
綺麗な背景と被写体が相まって良いとされる写
真じゃなくて、あくまで被写体がメインに据え
られた良い写真を目指したかったので、シンプ
ルなスタジオでの撮影に決定しました。

—— 確かに屋外って要素が多いですよね。自
然光に植物に建物に……。

石原 そうそう！自分が制御できない、勝手に
移りゆく要素が多すぎて。もちろん良い部分も
あるけど、被写体の邪魔になっちゃう要素もあ
るかなって思いますね。

—— 作品を通して特に表現したいものはあり
ますか？

石原 実はまだ模索中なんですよ。被写体と
私との関係性を写真に反映させたいのか、光と
影を扱う際の技術的側面を突き詰めたのか…
最近ずっと考えています。

—— どのようなものを「表現したいもの」と
して自分の中に位置付けるのかっていうのは検
討段階なんです。

石原 そうだね（笑）。でもこのプレ卒を制作し

てる時、被写体になってくれた子の1人が、「自
分の鼻が綺麗に見える」って言うてくれて。被
写体がコンプレックスに感じていたり、好きに
なれずにいる部分を、より綺麗に見せるってい
うことができたらいいな、とは思っています。

私の思う写真の魅力

—— 将来こうありたいと思う像はありませ
るか？

石原 大学を卒業してから写真に関わってい
きたいとは思っています。趣味で写真を続ける
ことはできると思うんだけど、仕事となると興
味があるだけじゃ困難な部分も少なくて。やっ
ぱり、自信を持ってこれができます！これが得
意です！って言えるところまで、気持ちや実
力を持っていけたらいいんだろうな。

良い！かわいい！かっこいい！って、まずは
自分自身が納得できるような作品を作ることが
近い目標としてありますね。大学の授業課題を
提出したとき、最初に口をついて出るのが反省
点だった、みたいなことをなくせるように。そ
の作品が今の自分のベストです！って自信を
持って言える状態を目指したいです。

—— 最後に、石原さんにとっての写真という
表現方法の魅力を伺いたいです

石原 選んだ被写体に対する興味関心や、それ
らが自分にとってどう見えているのかを視覚的
に表現できることが、写真の魅力だと思います。
写真を見返すと、自分の撮影スタイルや現像
の仕方の変化がすぐわかって、次の撮影に反
映できることも面白いですね。

現代ってスマホのカメラも進化してきて、誰
でも綺麗な写真を簡単に撮れるようになったと
思います。だからこそ、自分にしかできない写
真表現やこだわりをしっかりと確立していきたい
と思っています。

（注1）石原さんの学年（2019年度入学）まで、
芸術専門学群では「専攻の中に領域」という
区分が行われていたが、それ以降入学の学年
では「専攻」の区分はなく14領域に再編さ
れている。

（注2）芸術専門学群の略称

（注3）卒業制作の作品を作る前段階の制作物

風景と存在の距離の中で

Artist 名倉 歩 NAGURA Ayumu
博士前期課程 芸術専攻
洋画領域 2年

Writer 大森 春歌 OHMORI Haruka
芸術専門学群 芸術学専攻
芸術支援コース3年



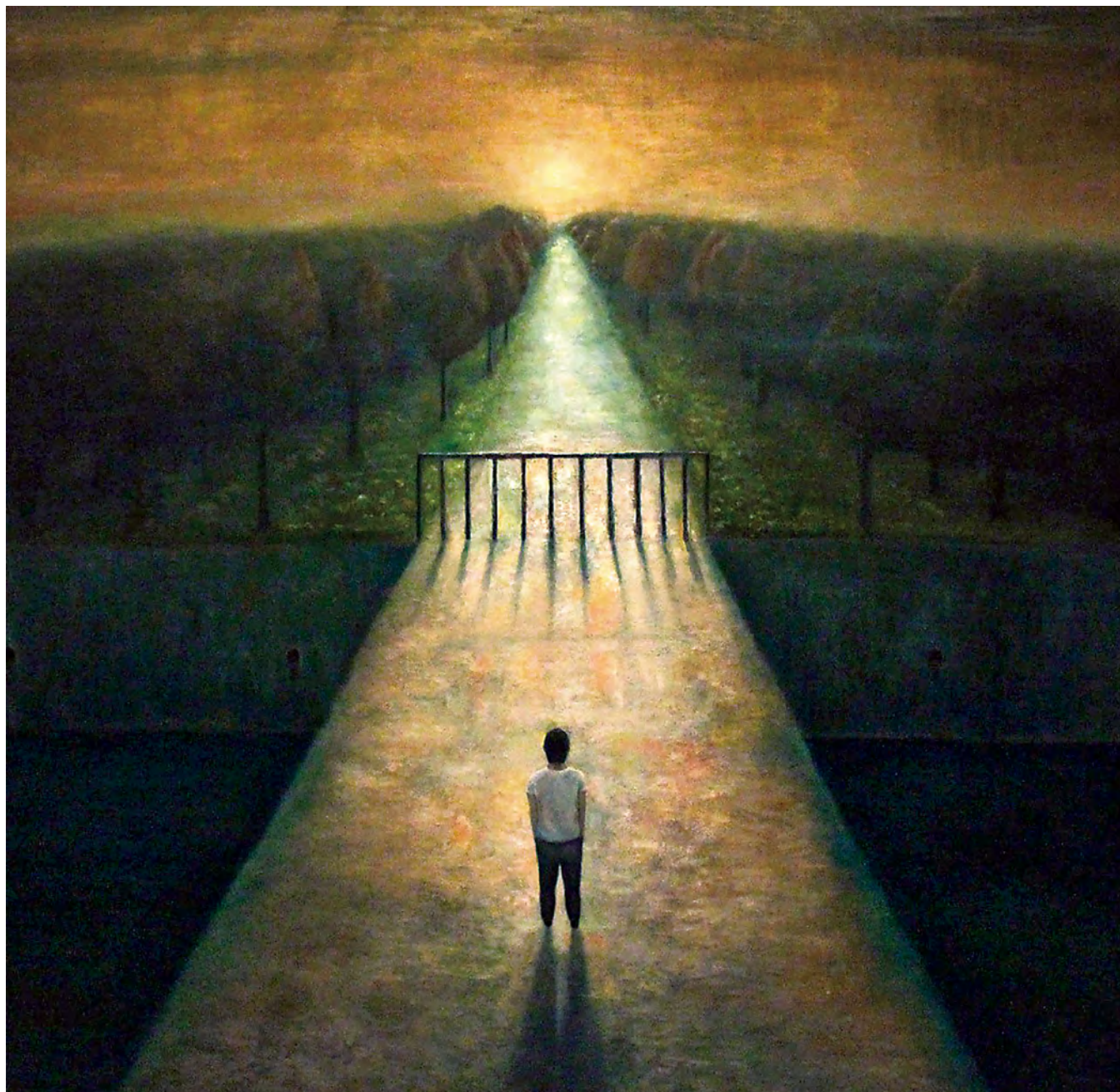
突然の激しい雨により表情を変えた川の流れ。洪水の後の川は、静けさの中に荒々しい余韻を残している。アトリエを訪ねると、制作中の油彩画がイーゼルに立てかけられていた。川が描かれた200号のキャンバスは、彩度の低い灰色の色調に覆われ、見る者をその波に飲み込んでしまいそうな引力を持っている。一点透視の遠

近法で画面奥に向かって植物が絡まった石垣が連なる。その間を、大きくうねり波を絡ませながら濁流が流れ、それらが向かう消失点の先からは仄かに光があふれている。曇天には、雲にも煙にも見える四角い形態が連なっており、かすかに不穏な空気が漂う。よく見ると、波間には青色に混じり赤色が多く散りばめられてい

た。聞くと、赤色は名倉さんにとって、その土地に在り続け、生と死を繰り返す「存在」を表す色なのだという。

野球少年からの変身

油絵の匂いに満たされたアトリエに毎日通い詰め、200号のキャンバスを前に修了制作に打ち



《誰もいない場所》2017年、油彩・キャンバス、1620×1620mm



《memento mori》2019年、油彩・キャンバス、1818×2273mm



《Landscape》
2020年、油彩・キャンバス、1620×1620mm

込む名倉さん。だが、人生の軌跡を振り返ると、実は絵筆よりも、バットを握ってきた年月の方が長い。小学生の頃から野球に打ち込み、高校にも野球のスポーツ推薦で入学した生粋の野球少年だった。だが、高校3年生になり野球以外で進学する選択肢を検討した際、直感的に「美術だ」と思い、美大に進学することを決めたという。その決断の背景にあったのは、楽しかった図工や美術の授業の思い出と、そこから生まれた美術への好意的な感情だった。美大受験のために美術予備校を訪ねた名倉さんは、そこで初めて本格的に油絵の具を触り、心を動かされた。「容易には乾かない絵の具が新鮮で、乾いた後の塊感に強く惹かれた」という。この油絵との出会いがきっかけとなり、大学で油絵を専攻することを決意した。

震災をテーマにして

2015年、横浜美術大学の絵画コースに入学し、美術を基礎から学ぶ日々を経て、作品制作に心酔していった。自由課題の制作にあたり独自のテーマを探る中で行き着いたのは、自身も中学2年生の時に経験した、東日本大震災。「時を経ては歴史の一部となり、次第に風化していくであろう震災の今を記録したい」という思いで取り組んだという。毎年現地に足を運び、重ねた取材やドローイングを踏まえて、人物を含む風景画を多く制作した。同テーマ2作目の作品《誰もいない場所》(2017年、油彩・キャンバス、S100号)は大学3年生の時の作品である。現地で実際に見た、帰還困難区域への立ち入りを禁じるために設けられた柵に着想を得て制作された。画面奥に向かって描かれた一本道。路上には小さな柵があり、その手前には、棒立ちの男性の後ろ姿が描かれている。しかし、このように震災を画題として扱う作品をいくつか描

く中で、名倉さんはその土地に住む当事者と、取材して描く外部の自分にはどうしても拭えないギャップがあることを感じていた。そして次第にそれは「自分は震災を『利用して』絵を描いているのではないか」という後ろめたさに繋がっていく。

横浜美術大学在学中は、震災のあった土地を画題にしていたが、「描くことへの罪悪感」に苛まれるようになった名倉さんは、制作環境を変えるため、筑波大学の大学院に進学した。そこで新たに取り組んだのは、不特定の場所の風景を描く試みだった。現在は震災のあった土地に限らず色々な土地を取材し、それらのイメージを組み合わせた風景画の制作に取り組む。「どんな風景にも過去があり、歴史がある」と語る名倉さん。それらを想像してイメージを描き、絵を通じて可視化することを目指している。描く土地には福島などかつて画題にしてきた場所も含まれており、特定の場所を指定せず対象の範囲を広げることで、その土地に生きる人々に抱く罪悪感を超克しようと模索している。

たどり着いた二つのシリーズ

名倉さんはかつて、存在感を放ち、主役になりやすい人物を、風景を背景にして画中に描きこむことが多かった。しかし、人を描くと、似せるための描写に意識が集中することで「本当に描きたい風景を見失いかけた」という。絵と切り離されかけた存在になってしまっている人物の扱いに悩み、名倉さんは試行錯誤を重ねた。そして次第に人の存在を具体的に描くことをやめ、その存在を薄めて風景に溶け込ませることを目指すようになった。現在いくつかの風景画には、人影にも見える黒い塊が登場しているが、みな顔や性別を判別することはできない。これらを指し、名倉さんは「風景の中にいる不

確かな存在を想像し、人の形をした影を通して表現している」と語る。加えて「人型にしてしまうのは、自分が人間だから。本当はその存在を人に断定したくはない」と今も葛藤は続く。人影のより魅力的な形を追い求めている自分に気づき、また名倉さんはプレーキをかける。まだ試行錯誤は終わらない。

現在、制作している作品には2つのシリーズがある。「Landscapeシリーズ」と「湖シリーズ」である。前者は人の形をした黒い影のような存在が風景の中に描写される、心象表現のシリーズ。他方「風景だけで成立する絵画になるなら、(人の存在は)入れなくてもいい」と考えた末に辿り着いた後者は、取材した土地のイメージを組み合わせ、想像を基に人の存在しない風景画を描くシリーズで、修了制作で目下取り組んでいるテーマでもある。

修了制作への取り組み

2020年度修了に向け制作されたのは、湖シリーズの一作《Gray landscape》(2020年、油彩・キャンバス、1940×2590mm)。冒頭に触れた川を描いた風景画で、曇天の下荒れた川の流れと、それらを画面奥へと運ぶ石垣がグレーを基

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

調とする色調で描かれている。この風景の中に、人影は見当たらない。だが制作当初、名倉さんは影の存在を取り上げた「Landscapeシリーズ」を多く描いていたため、本作にも人の存在を登場させようと考えていたという。最初のイメージを固める段階で描いた100枚のクロッキーには、確かに影の存在を模索するエスキースが多く残っていた。だがその後、小さなキャンバスに油彩で構想を練り、再び紙に戻り試作を重ねる過程で、次第に人の存在は薄まっていったという。そして200号のキャンバスを前に、現在の湖シリーズのイメージが固まった。また同作では、作品が生み出された背景に存在したコロナ禍へのイメージも含まれる。霧のように不確かな未知の脅威を表すにあたり、色によって固

有の意味を見出すことは適していないと考え、モノトーンに近い色調を選択したのだという。

旅立ち

つくばに居を移したのは約2年前。のびのびと制作に打ち込める環境や、他学群の価値観が異なる学生と出会える環境は、制作に少なからずプラスの要素をもたらしているという。現在は毎日アトリエでの制作が可能になったが、今年の春から夏にかけては新型コロナウイルス感染拡大の影響でそれも叶わない日々を過ごした。大学に入れず、修了作品の制作もままならず苦しんだ。そしてそのような状況下で改めて気付かされたのは、制作拠点があることの大切さだったという。当たり前前大学のアトリエを使えることの有り難さを改めて痛感し、卒業後の制作拠点について改めて考える契機となった。取材時、名倉さんは修了後の2021度からチェコに渡ることを予定していた。チェコのアトリエを制作拠点にするという道を選択することで、自分の制作や考え方に変化をもたらしたいと強い決意を固めていた。だが、新型コロナウイルスの長期的な拡大等様々な事情が重なり、渡航は叶わなくなってしまった。つい数か月前「余

計なことを振り払ってチェコに行き、新たな環境でアーティストとして成長したい」と語る名倉さんの、希望に満ちた瞳が思い出される。美術予備校で運命を感じた油絵の具との出会いから約5年経ち、油絵での制作を続けてきた名倉さんだが、「今後は他のマテリアルも試してみたい。表現の幅を広げつつ、時代にあわせて更新していきたい」と意欲を見せる。憧れの異国への渡航は断念せざるを得なくなってしまったが、今も前向きに自身の未来を見据え、今後もアーティストとして活動が続けていく。

画中に登場する、人物、人影、ある土地…。それらの持つ意味や距離感に対して繊細に気を配り、強弱を調整する。絵に他意が生まれたり、本質からずれたりしていると感じると、モチーフを曖昧に、抽象的にして、具体的なものが持つ余計な意味を振り払う。かつて先行していた人の存在。具体性が絵にもたらす意味に悩み、絵の中に溶け込んでいったその「存在」。しかしそれらは消失したわけではなく、現在の名倉さんの描く不特定な風景の中にも確かに存在している。どんな風景においても、そこで繰り返される物語を表現する存在として、黒い影や赤色に形を変え、風景の背景に宿っているのである。



修了制作 制作風景 (2020年12月7日撮影)



《Gray landscape》2020年、油彩・キャンバス、1940×2590mm

漆の「鏡面表現」を目指して

Artist 高橋 呼春 TAKAHASHI Koharu
芸術専門学群 構成専攻
クラフト領域4年



Writer 木下 碧 KINOSHITA Midori
芸術専門学群 芸術学専攻
芸術支援コース3年



作品を磨いている様子

漆を使って鏡を作る

「漆」と聞いてイメージするものは何だろうか。触れるとかぶれることもある植物としてのウルシだろうか。あるいは「伝統工芸品」と名のつくような、黒塗りの皿やお箸などの食器、もしくは仏壇、位牌などの宗教的な道具を思い浮かべるかもしれない。漆でコーティングされた品々は黒くつやつやとして、どこか高級感があり、私たちの生活にはあまり馴染みのないものに思われる。

クラフト領域で漆芸を専攻する高橋さんは、漆という伝統的な素材を用いて現代美術の作品を制作している。彼女の卒業制作は漆を塗って磨くという工程を何度も繰り返して光沢を出し、姿が映るほどの鏡面を作り出すというもの

だ。彼女の作業場をたずね、作品の着想源や制作についてお話を伺った。

漆を塗ってひたすら磨く

——卒業制作の進捗はいかがでしょう。

高橋 あれなんですけど（作品を指差す）。これはちょうど昨日漆を一回塗って磨き始めたところなんです。これからこの面がどんどんピカピカになっていきます。

——同じく漆が塗られた丸い板がありますが、こちらは違うものですか。

高橋 全く同じものを横に2つ並べて壁面展示しようと思っていて。額装して。額装っていうか鏡のフレームをつけて。

——作品を作り始める前に試作などはされたの

ですか。

高橋 一応、前段階の作品みたいなものがあったて、これです。塗装段階でちょっと試してみました。これ（卒業制作）より像がはっきり映るんじゃないかな。裏は板に和紙を貼り付けているだけです。フレームはもう既製品です。鏡を買って、鏡を外して漆を塗った板をはめ込んでしまった状態です。卒業制作でも市販の鏡を買って鏡を抜いてはめ込みます。鏡らしさを出したかったのでフレームで変な装飾とかはしないです。

——現在完成度はどのくらいですか。

高橋 これは……。でも後は塗って磨くだけなので、70%くらいまでできています。磨いて、塗って、を繰り返して、その後、今度は「ふ

2 つくばアートフィールド Artist × Writer

き漆」っていったって、漆を擦り込んで磨いて、また磨いて、って感じで。磨くだけです。じゃあ70%もいってないか。

——やはり一度漆を塗っただけでは光沢は出ないものなのでしょうか。

高橋 出ないです。これもまだ見てわかるくらい表面がボコボコで。そういうところを直していきます。これから完璧な鏡面に仕上げていき——実際に漆の技法を用いる中で、面白い点や難しい点などがありますか。

高橋 手間がかかるものなので、作り終わった時の達成感とか、「あ、できた」という思い通りにいった時の充実感とかはすごくいいです。けど、自然素材なので、なかなか思い通りに完璧にいくことは少なくて、今も温度計で管理してるんですけど、湿度とか温度とかも管理しなくちゃいけないです。下手するとカビたりするんですよ。繊細で神経を使う作業が多いのは大変です。

鏡面と漆の出会い

——作品の構想を思いついたきっかけは何でしょうか。

高橋 私が卒業制作を作るきっかけになったのが、アニッシュ・カプーアの《Sky Mirror》っていう作品です。この人は普段、漆を使っているわけじゃないんですけど、日本にきたときだけ、こうやって鏡を映すような作品を漆で作ったんですね。これを知って、鏡面とか抽象表現っていうものにすごい興味が出てきて。鏡面を使った作品って意外と他にもあるじゃないですか。ジェフ・クーンズの《ラビット》とか。私、ブランクーシの《空間の鳥》も鏡面表現だと思っているので、「抽象彫刻と鏡面表現って結構関係があるんじゃないか？」っていうところから始まってますね。1番最初はカプーアです。漆の作品をただ調べてたら、これ（カプーアの作品）に当たったって感じです。

——高橋さんは抽象彫刻を目指すのではなく、あくまでも鏡面をテーマに作品を作ろうと考えられたのですか？

高橋 そうですね。鏡面から連想されるものって色々あって、例えば鏡の国のアリスって文学作品だけど鏡の世界が中心になっているじゃないですか。だからそういう物語とか。あとは古事記とか。鏡って結構いろんなところでいて、歴史の中でずっと人々の身近にいつもあって、なのでそのモチーフ自体が、もうすごい不思議だなんて思って興味を引かれたんですね。あとは、漆の一つの表現方法として、「呂色（ろいろ）仕上げ」という、漆の面を完璧に磨きあ

げて鏡面にする漆の表現方法があって、そこにチャレンジしたくなったんです。

——呂色仕上げは他の作家の作品だとどのように使われているのですか。

高橋 壁面とか、それこそ抽象彫刻でも多いと思いますね。工芸品だと、ただ単に最高に綺麗な面を作りたいって呂色仕上げを使っている方は結構いるんですけど、鏡面であるという意識を持っている方は少ないと思いますね。

漆と出会うまで

——現在の専攻に進んだ理由は何でしょうか。

高橋 私は高校3年生で進学先を選ぶ時点では勉強しかしていなくて、でも絵を描くのが好きだったり、ものづくりが好きだったり、明確に好きだって言えるのが美術の分野だったんですね、だからそちらには行きたいって思ってたんですよ。でも工芸だけじゃなくてイラストとか、デザインとか、まだ私の中でいろんな方向に興



高橋呼春《鏡》2021年 縦77cm×横55cm

味があったので、美術の分野の中でいくつか選択肢はあったと思います。その段階では、でも研究室を決めるくらいで、やっぱここだな、と思ってクラフトに来ました。

——そもそも漆や伝統工芸などに興味を持たれたきっかけはあるのでしょうか。

高橋 そうですね、特にこれっていう劇的なものがあるわけではなくて。伝統工芸士の方が作業する様子っていうのを、TVで特集しているのをよく観ていたんですね。で、めちゃめちゃカッコいいなって思って。「作る人ってこんなにカッコいいんだ！」っていうのが始まりで、憧れを捨て切れなかったって感じですね。伝統工芸全般に興味があって、筑波大学でできる、かつ私がやってみたかったのが漆で。なので、和紙を作っている場所にインターンに行ったりとか、そういうことも結構してます。

今後の活動について

——最後に今後、漆でも漆以外でも何かやってみたいことはありますか。

高橋 日本画とかの技法でも漆を使うものが

あって、それを壁画に応用したりすることがあるんですね。ミャンマーとかベトナムとかにそういう作品があるので行きたくて。もちろん日本の古墳の中にもあると思いますけど。海外進出したいなあ。今、一応来年の Japan Expo (注) には出展予定なんですけど、コロナがあるからどうなるかわからなくて。「WABI SABI」っていう日本のブースがあって、漆のオブジェとかを飾りつつお話ししながらドローイングをしたりとかしようかなと思っています。自分の作品をもっと世界に出したいです。

終わりに

インタビューをした際には作品は未完成であったが、手をかざすと黒々とした面にうすら影が映るのがわかった。現代の鏡に映る像に比べれば幾分かぼんやりとはしていたが、古代の人々が使用していた鏡とはこのようなものだったのかもしれない。卒業制作は無事完成し、《鏡》というタイトルがつけられた。以下は彼女が書いた作品の説明文である。

「漆によって作り出された鏡面によって、空間に新しい次元を創出する。漆はその物質性を保ったまま、鏡面性を持つものとして鑑賞者に作用する。

鑑賞者の身体は、漆黒の鏡面に吸い込まれ、そして吐き出される。その動きは繰り返され、漆の生み出す虚の世界に入り込みながら、自分の居場所と視点を次々と変化させていく。

本物でありながら、決して本物たりえないものから、見るものは世界を把握する。」

残念ながら新型コロナウイルスの蔓延により卒業制作展は中止になり、学内で小規模な展覧会が開かれるのみとなった。彼女の作品が「鏡」として多くの人々の姿を映す日が来ることを願ってやまない。

(注) 毎年7月にフランスで開催される日本文化の祭典。2021年の開催は延期された。高橋さんは現在出展について検討中とのこと。



高橋さんが使用している作業机。中央にある小さな鏡は卒業制作の試作品。



Art Writing 第15号 2021年6月26日

指導・編集・発行 筑波大学芸術支援研究室

〒305-8574

茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術系

表紙写真

アトリエにて：佐藤真奈美の銅版画作品たち（撮影：山根由咲）

アトリエにて：漆を磨く（高橋呼春）（撮影：杉山兵介）